中國小說史略考證　第二十八

中　島　長　文

第二十八編　清之譴責小說

1光緒庚子（一九〇〇）後、以至則南亭亭長與我佛山人名最著　二八二十一

『大略』寫印本十七清之譴責小說云、文人於當時政治社會現象有不滿、摸繪以文章、且專著其缺失、則所成就者常含有攻擊政俗之精神、今名之曰譴責小說。此類著作、早有成書如儒林外史、作於乾隆初、而中間忽無嗣響、綠野仙跡鏡花緣、雖于人事間有譏彈、然不遇尒牽連、主旨固不在此。逮光緒末、積弱呈露、人心漸不平、抉剔敝竇之風頓起、于是譴責小說亦忽而日盛矣。

又云、當是時此類小說之出甚盛、讀者意見、幾以爲惟如此作家、始超出于流輩、故弄筆者尤樂爲之。尤著者爲南亭亭長（李伯元）之官場現形記、初載于上海之繁華報、及我佛山人（吳沃堯）之二十年目睹之怪現狀、初載于橫濱之新小說、然皆中輟、後以聲譽甚盛、乃又漸漸續作成書、故皆篇帙甚多、而內容頗有蕪累也。

『史略』各版間の異同　合訂再版「光緒庚子（一九〇〇）後」の「後」字の前で斷句、「後」字を次句に繫ぐは誤り。また三版―七版まで「譴責小說之出特盛」の「譴」字を「出」字の前に誤植する。訂正版で正された。「細民暗昧」の「暗」字、三十八年版全集まですべて「闇」に作り、五十七年版で「暗」に作る。「越二年卽庚子歲」の「歲」字、『大略』鉛印本から第七版まで無く、訂正版で加えられた。「則南亭亭長與我佛山人名最著」の「名最著」三字、『大略』鉛印本、初版では「尤有名」に作り、合訂再版で現行の如くになった。

「小說的歷史的變遷」第六講清小說之四派及其末流二、諷刺派云、諷刺小說是貴在旨微而語婉的、假如過甚其辭、就失了文藝上底價値、而它的末流都沒有顧到這一點、所以諷

刺小說『儒林外史』而後、就可謂之絕響。

胡適「文學改良芻議」云、吾每謂今日之文學、其足與世界「第一流」文學比較而無愧色者、獨有白話小說（我佛山人、南亭亭長、洪都百鍊生三人而已。）一項。此無他故、以此種小說皆不事模倣古人、（三人皆得力於『儒林外史』、『水滸』、『石頭記』。然非模倣之作也。）而惟實寫今日社會之情狀、故能成眞正文學。『新青年』第二卷

錢玄同「寄陳獨秀」云、弟以爲舊小說之有價値者不過施耐庵之『水滸』、曹雪芹之『紅樓夢』、吳敬梓之『儒林外史』、李伯元之『官場現形記』、吳趼人之『二十年目睹之怪現狀』、曾孟璞之『孽海花』六書耳。曼殊上人思想高潔、所爲小說、足爲新文學之始基乎。此外作者、皆所謂公等碌碌、無足置齒者矣。劉鐵雲之『老殘游記』、胡先生亦頗推許。吾則以爲其書中惟寫毓賢殘民以逞一段爲佳、其他所論、大抵皆老新黨頭腦不甚清晰之見解、黃龍子論「北拳南革」一段信口胡柴、尤足令人忍俊不禁。……一九一七年二月二十五日。『新青年』第二卷第一號

胡適「再寄陳獨秀答錢玄同」云、……其評『老殘游記』、尤爲中肯、適客中無書、所學諸書皆七年前在上海時所見。文成後思之、甚悔以『老殘游記』與吳趼人李伯元並列。今讀錢先生之論、甚感激也。適於錢先生所論、亦偶有未敢苟同之處。今略說之、以就正於足下及錢先生。（中略）（5）錢先生謂『水滸』『紅樓夢』『儒林外史』『官場現形記』『孽海花』『二十年目睹之怪現狀』六書爲小說之有價値者、此蓋就內容立論耳。適以爲論文學者固當注重內容、然亦不當忽略其文學的結構。結構不能離內容而存在。然內容得美好的結構乃益可貴。今卽以吳趼人諸小說論之、其『恨海』『九命奇寃』皆爲全德的小說。以小說論、似不在『二十年目睹之怪現狀』之下也。適以爲『官場現形記』『文明小史』『老殘游記』『孽海花』『二十年目睹之怪現狀』諸書、皆爲『儒林外史』之產兒。其體裁皆爲不連屬的種々實事勉強牽合而成。合之可成無數短篇寫生小說。此類之書、以體裁論之、實不爲全德。若我佛山人經意結構之作如『恨海』『九命奇寃』、則與此類大不相同矣。『二十年目睹之怪現狀』在上所擧同類之書中、獨爲最上品。所以者何？此書以「我」爲主人。全書中種々不相關屬之材料、得此一個「我」、乃

有所附着、有所統系。此其特長之處、非李伯元所及。『孽海花』一書、適以爲但可居第二流、不當與錢先生所舉其他五書同列。此書寫近年史事、何嘗不佳？然布局太牽強、材料太多、但適於箚記之體、（如近人『春冰室野乘』之類）而不得爲佳小說也。其中記彩雲爲某妓後身、生年恰當某妓死時、又頸有紅絲爲前身縊死之證云々、皆屬迷信無稽之談。錢先生所謂「老新黨頭腦不甚清晰之見解」者是也。適以爲以小說論、『孽海花』尚遠不如『品花寶鑑』。『品花寶鑑』爲乾嘉時京師之『儒林外史』。其歷史的價値、甚可寶貴。淺人以其記男色之風、遂指爲淫書、不知此書之歷史的價値正在其不知男色爲可鄙薄之事、正如『孽海花』『官場現形記』諸書之不知嫖妓納妾爲可鄙薄之事耳。百年後吾國道德進化時、『新青年』第二百卷第一號中將有人痛罵今日各種社會寫實小說爲無恥誨淫之書者矣。（美國人驟讀此種小說、定必駭怪、同此理也。）故鄙意以爲吾國第一流小說、古惟『水滸』『西遊』『儒林外史』『紅樓夢』四部、今人惟李伯元吳趼人兩家、其他皆第二流以下耳。質之足下及錢先生以爲何如？……民國六年五月十夜。『新青年』第三卷第四號

錢玄同「寄胡適」云、……日前由獨秀先生見示五月十日先生致獨秀先生之書、對於新青年三卷一號玄同之通信、有所奬飾、有所規正。玄同當時之作此通信、不過偶然想到、瞎寫幾句。先生之奬飾、殊足令我慚恧。至於規正之語、今具答如左、願先生再敎之也。（中略）（5）先生謂「官場現形記、……二十年目睹之怪現狀、諸書、其體裁皆爲不連屬的種々實事勉強牽合而成。……此類之書、以體裁論之、實不爲全德。」此說極精。又謂「吾國第一流小說、古人惟『水滸』『西遊』『儒林外史』『紅樓夢』四部。今人惟李伯元吳趼人兩家。」斯論尤確不可易。玄同前以『水滸』『紅樓夢』『儒林外史』『官場現形記』『孽海花』『二十年目睹之怪現狀』六書、爲有價値之小說、此是偶然想到、不曾細細思量。得先生糾正、正甚感。惟先生又謂「二十年目睹之怪現狀在諸不全德的小說中、獨爲最上品。因其書以「我」爲主人、全書中種々不相關屬的材料、得此一個「我」、乃有所附着、有所統系、此其特長之處。」玄同以爲若照此說、則『老殘游記』中亦以一「老殘」貫串種々不相關屬之材料、此「老殘」亦可與「我」同論也。然此終是牽強。記得十年

前見『新小說』中登載『二十年目睹之怪現狀』好像是到「我」之歸娶而止。今書肆所售單行本、則以下又多了若干回、如「樑頂糞」等事、皆前此所無、而文筆之冗濫、亦大不如前。此卽由「不連屬的種々實事勉強牽合而成」、可多可少、「可至無窮之長」之故。故雖以吳趼人自續、亦覺其無謂。此亦足爲不全德的小說不能盡善之證。又先生謂「以小說論、孽海花尙遠不如品花寶鑑。」此說玄同亦以爲然。（下略）『新青年』第三卷第六號

2 南亭亭長爲李寶嘉、以至顧頡剛「讀書雜記」等）　二八二—九

『史略』各版間の異同　『大略』寫印本には直接該當する部分がない。「江蘇武進人」の「武進」二字は、『大略』鉛印本及び初版では、「上元」に作ったが、合訂再版で「武進」と訂された。「後以〃舖底〃售之商人」の「後以」二字、合訂再版のみ「以後」に誤る。「所著有『庚子國變彈詞』若干卷、……分刊于『繡像小說』中、尤有名。」計五十九字を『大略』鉛印本、初版では「有長篇小說曰『文明小史』、斥責時敝、分刊于繡像小說中、亦有名。」に作り、合訂再版で現行となる。「寶嘉亦應商人之托」の「亦」の字、『大略』鉛印本、初版では「乃又」二字に作る。「三十二年三月以瘵卒」の「二」字、『大略』鉛印本では正しく「二」に作ったが、初版で「三」に誤り、三十八年版全集まで踏襲し、五十七年版全集で訂された。（參看本篇後出胡適序注）最後の「及顧頡剛「讀書雜記」等」は合訂再版で附加された。そのため「『新庵筆記』三及」の「及」の字が、合訂再版以降、讀點となった。

周桂笙『新庵筆記』云、昔南亭亭長李伯元徵君、創『游戲報』、一時靡然從風、效顰者踵相接也。南亭乃喟然曰、何善步趨而不知變哉。遂設『繁華報』、別樹一幟。一紙風行、千言日試、雖滑稽頑世之文、而識者咸推重。丙午三月、徵君赴修文之召、惜秋生歐陽巨源繼之。（『小說舊聞鈔』引至此爲止。）未幾惜秋亦歸道山、山陰任堇叔復繼之。堇叔性亢爽、往々爲人愛過而不辭、卒以此賈禍、惜哉。『繁華報』創始至今、垂十一載、任堇叔僅以能作數篇文數首詩之伎倆、而遂不免于縲絏之辱。夫堇叔能有數篇文數首詩之伎倆、窮年假題發揮、玩世不恭、忽而嘻笑、忽而怒罵、其怨毒之于

人、固已深矣。然今日之獄、豈其罪歟。初董叔據錄訪稿、載吳娼蟾月樓事、被控卽輟事。越七日、始被逮、知復有怡情別墅事、董叔明知無與于己、然無從自辯、遂羈禁一月、報亦停版、『繁華報』遂亡、時庚戌三月十三也。昔『春江花月報』之停版若干日、爲侮聖也。『蘇報』之被封、爲排滿也。『民呼』之被禁、爲譏刺官場也。『民吁』之輟業、爲獲罪外人也。皆彰彰在人耳目。今于此案、究竟未悉、第聞妓女封禁報館之謠。然使『繁華報』之被禁、幷罪及其主筆者、而僅僅爲揭載妓女之一二隱事也歟。則昔日『花月痕』案、有讞成矣。往者『花月報』嘗以『論語』一書、改爲嫖經、當道指爲侮聖、遂停止出版、然不數日卽啓封矣。使『繁華』之案、果如所聞、則侮妓之罪、寧重于侮聖。吾于此敢發一不祥之預言曰、驅國人他日樂爲娼優而不爲聖賢者、此案作之俑也。『明清小說資料選編』九五〇頁

胡適「官場現形記序」云、『官場現形記』的著者自稱〃南亭亭長〃、人都知道他是李伯元、却很少人知道他的歷史的。前幾年因蔣竹莊先生（維喬）的介紹、我却收到著者的侄子李祖傑先生的一封長信、纔知道他的生平大概。

他的眞姓名是李寶嘉、字伯元、江蘇上元人、生于清同治六年（一八六七）。少年時、他在時文與詩賦上都做過工夫。他中秀才時、考的是第一名。他曾應過幾次鄉試、終不得中舉人。後來在上海辦『指南報』、不久就停了。又辦『游戲報』、是上海〃小報〃中最早的一種。他後來把『游戲報』賣了、另辦『繁華報』。他主辦的『游戲報』我不曾見過。我到上海時（一九〇四）、還見着『繁華報』。當時上海已有幾種小報專記妓女的起居、嫖客的消息、戲館的角色等事。『繁華報』在那些小報之中、文筆與風趣都算得第一流。

他是一箇多才藝的人。他的詩詞小品散見當時的各小報。他又會刻圖章、有『芋香印譜』行于世。他作長篇小說似乎多在光緒庚子（一九〇〇）拳禍以後。『官場現形記』是他的最長之作、起于光緒辛丑（一九〇一）、至癸卯年（一九〇三）成前三編、每編十二回。後二年（一九〇四—五）又成一編。次年（光緒丙午、一九〇六）他就死了。此書的第五編也許是別人續到第六十回勉強結束的。他死時、『繁華報』上還登着他的一部長編小說、寫的是上海妓家生活、我不記得書名了。他死後此書聽說歸一位姓歐陽的朋友續下去、

後來就不知下落了。他的長篇小說只有一部『文明小史』是做完的、先在商務印書館的『繡像小說』裏分期印出、後來單印發行。

李寶嘉死時只有四十歲、沒有兒子、身後也很蕭條。當時南方戲曲界中享盛名的須生孫菊仙、因爲對他有知己之感、出錢替他料理喪事。（以上記的、大體根據魯迅的『中國小說史略』、頁二二七—八。魯迅先生自注、他的記載是根據周桂笙『新庵筆記』三、及李祖傑致胡適書、我現在客中、李先生原書不在我身邊、故不及參校。『小說史略』初版記李氏死于光緒三十三年三月、年四十、而下注西曆爲〃一八六七—一九〇六〃。一九〇六爲光緒三十三年丙午、我疑此系印時誤排爲三十三年。今既不及參校、姑且改爲丙午、俟將來用李先生原書訂正。）（後略）一九二七、十一、十二、在上海。『胡適文存』三集卷六。

顧頡剛「官場現形記之作者」（讀書雜記）云、適之先生前託我覓李伯元的事蹟。因念李伯元是常州人、當於常州人中尋之。吾友趙君閒居常州、因以問之。事情有眞巧的、一說起乃知他正是李伯元的內侄壻。他於是就把以下的李氏種種事蹟　寫告我——

李伯元、名寶嘉、原名寶凱、別字南亭亭長、武進人。生於同治六年丁卯。三歲失怙。兄方五齡、亦於是年殤。遺腹生姝、長適同里惲氏。

其堂伯李念之任濟南知府有年、愛其敏慧、挈入署中讀書。年十三四始回常州。

其從兄李穀宜尋以道員總辦滁州土釐局、招君襄辦文案。弱冠後遊洄宮、旋食廩恭餼！屢試省門不售、納資爲縣丞。籤分山東、未赴。

入洄後旅寓滬濱、創辦指南報館、遊戲報館。善書畫。所著有庚子國變若干卷、海天鴻雪記六本、李蓮英一本、（以上三種在自辦之報館排印。李蓮英一書當時曾由官廳禁過、）文明小史、繁華夢、活地獄各若干本、官場現形記五編共三十本、現行〔形〕記一書流行甚廣。慈禧太后索閱此書、按名調查、官吏有因以獲咎者、致是書名大震、銷路愈廣。

光緒末、清廷開經濟特科、某侍郎以君薦。爲周少樸所沮。蓋曾以文字開罪於周也。

在滬昌言革命、與戊戌政黨康梁諸公亦素通聲氣。

年十九、娶妻鍾、三十四、納妾王。三十七、鍾卒、翌年續娶莊。越二年、寶嘉以癆瘵卒。時光緒三十二年丙午、年方四十。妻妾均無出、以從兄寶章字穀宜之子祖佺嗣、念之孫也。

寶嘉卒後、家貧甚、無以爲生。乃以官場現形記版權讓去、得資數千元、始得支持。

剛按、伯元在滬甚久、諒上海必有他的摯友和熟侶。如能替他做一篇詳傳、亦將來文學史上的好材料也。『小說月報』第十五卷第六號一九二四年六月

李寶嘉の履歴や著作活動をまとめたこの一段の記述については、現在の研究水準からは幾つかの正確でない點があるようで、そうしたことについて魏紹良「魯迅之李寶嘉傳略箋注」（『李伯元研究資料』一九八〇年上海古籍出版社）は、『史略』に對して詳細な注を加え、訂正を施し疑問點を指摘している。

「少擅制藝及詩賦、以第一名入學、縲擧不第」　この記述は『大略』寫印本にはなく、『大略』鉛印本ではじめて現れ、『新庵筆記』と李祖傑の胡適宛ての手紙に據るという注があるので、主に李祖傑の手紙に基づくものであることが推測される。また從弟李錫奇の言では「伯元以鄉試第一名考取秀才後、只去江陰院試過一次。」という（前掲魏氏「箋注」引）。これらと合訂再版で補われた顧頡剛の「讀書雜記」の記述を考え合わせると、縣試第一等で秀才になり、江陰縣院試で童生の資格を得て縣學に入り、廩貢生に補せられたことになる。「累擧不第」は正確ではないそうだが、少なくとも李祖傑と李伯元の姪の婿である趙氏の說とは一致している、と考えてよいだろう。後に澄碧は「小說家李伯元」で、そうした說に立ってであろうが「由於伯父和母親督敎極嚴、李伯元學業精進、擅長八股詩賦、能書畫、工詞曲。二十來歲時考秀才、得第一名、補廩貢生、可是此後一直不得志。」とまとめている（前掲『資料』）。尙その時期を、顧頡剛「讀書雜記」は「弱冠後」と言い、澄碧は「二十來歲」とするのに對して、魏氏「箋注」は「自光緒十八年壬辰（一八九二）伯元二十六歲至光緒二十二年丙申（一八九六）伯元三十歲止、此五年中他曾取得鄉考第一名秀

才。」と二十代後半に設定する。

『指南報』　この新聞に言及するものはきわめて少ないが、『中國近代文學大系』史料索引集第二卷の「文藝報紙」は次ぎのように述べる。「『指南報』創刊于一八九六年六月六日（清光緒二十二年四月二十五日）。在上海出版。是李伯元于同年春末從常州移居上海後創辦的第一份報紙。報爲日刊、先後出版過六版、八版、十版不等。版面呈方型、同當時的『申報』相仿、用草沙紙或中國本紙單面或雙面印刷。首列論文、後接國內外時事新聞和社會新聞、末附京報選錄、皇上奏奉或詩詞。商業廣告占全報三分之二、常印于正版前或第四版後。李伯元在發刊詞「謹獻報忱」中談到、此報是在〝熟諳體例之西商指點〟下正式出版的。館址卽設在英租界內由英人創辦主持的文匯西報館內。文中指出本報宗旨有六點、〝以采萬國之精彩〟、〝以增朝廷之聞見〟、〝以擴官場之耳目〟、〝以開商民之利路〟、〝以寄環海之文墨〟、〝以寓斯民之風化〟。

『指南報』原仿『申報』、半年後始顯露出文藝小報的風貌。如社會趣聞逐漸增多、又如采用具有文學色彩的詞語作各類新聞的標題、以一八九六年十月二十八日爲例、就有〝大星忽殞〟、〝雷峰夕照〟、〝金焦點翠〟、〝隨苑秋鶯〟、〝自相矛盾〟等標題、這些編輯手法以後爲『采風報』、『趣報』所襲用。報上還多次登出啓事、望〝大雅諸公寄來詩詞歌賦幷論說〟、據所見資料、此報登載的最早的詩作發表于一八九六年十二月一日、作者翠微女史、詩爲題畫之二絕句。

此後、報上陸續發表息園居士（李根源）、金爲鶴主、倉山舊主等詩詞。

『指南報』雖非正式的文藝小報、但可視爲文藝小報之先河。對研究李伯元生平事迹中占有必要的地位。至于其停刊的確切日期、不甚明了、所見最後一期是一八九七年九月二十四日（光緒二十三年八月二十八日）、但據『奇聞報』一八九八年三月三十日所載「廣開報館說」文中云、〝……孰意『指南報』、『華報』、『蘇海匯報』、『華洋報』等。或開一年、或開數月、均因資本不敷、旋卽停刊、良可嘆也〟。據此可知一八九八年之前該報早已終刊。」

このほか、阿英の『晚清文藝報刊述略』は、初期の『游戲報』が『指南報』によって代送されたこと、また「至『指

南報』、則和其他大型報類似、不再贅。」と述べるのみで、一般紙としての働きには言及しない。一年餘でその刊行を終え、報學史の類もほとんど默殺するのを見れば、時の輿論にそれほど影響を與えた新聞ではなかったのだろう。

『游戲報』　阿英の『晩清文藝報刊述略』は、この新聞について次のように述べる。「『游戲報』創刊于光緒二十三年（一八九七）五月下旬、終刊期不詳、就訪求所得、可證明已發行至宣統二年（一九一〇）終、約五千號。光緒二十五（一八九九）、還曾重排書版本一次、自第一號起、每二十日爲一册、但沒有印全。重印本發行時、有一「告白」、足以說明報紙內容

……以恢諧之筆、寫游戲之文。遣詞必新、命題皆偶。上自列邦政治、下逮風土人情。文則論辨、傳記、碑志、歌頌、詩賦、詞曲、演義、小唱之屬、以及楹對、詩鐘、燈虎、酒令之制。人則士農工賈、強弱老幼、遠人逋客、匪徒奸宄、娼優下賤之儔、旁及神仙鬼怪之事、莫不描摸盡致、寓意勸懲。無義不搜、有體皆備……

與『繁華報』的內容很相類似。但逐日分類、却遠不如『繁華報』之多樣。大體首列一文、以下就連排趣味性的新聞、末附詩詞、雜著。日約五千言、排成兩方形板、反面廣告、共四板、用中國紙、單面印。丁酉年（一八九七）十一月以後、又逐日附送彈詞『鳳雙飛』單頁。篇首一文、間有佳作、大都出南亭亭長和茂苑惜秋生諸人手筆。（中略）初期由『指南報』代售、後設館址于四馬路惠福里。（後略）」

『中國近代文學大系』資料索引集第二卷の「文藝報紙」の解說は「一八九七年六月二十六日李伯元編的『指南報』首版刊登了〝代送『游戲報』不取分文〟的廣告、內云、〝四明游戲主人創行『游戲報』、託本館代爲排印、于昨日爲始、送閱三期、至二十八日再行收價。〟據此可知、『游戲報』正式創刊于一八九七年六月二十五日（清光緒二十三年五月二十六日）創辦人李伯元（遊戲主人）。一九〇一年後由其友歐陽巨源（茂苑惜秋生）接編、大約于一九一〇年（宣統二年）停刊。一八九九年五月、曾出過匯訂本、自第一期起、每月分訂兩册、至戊戌臘月止、共訂四十册、後未續出。（中略）作爲近代史上的第一份文藝報紙、它先後登載重要文學作品。（後略）」と言う。阿英の記述と些細な點で合わ

ないところもあるが、大旨は一致する。ただ一九〇一年に友人の歐陽巨源に編輯を任せたと言う『大系』の解説は、『史略』の「後以〝舖底〟售之商人」という、おそらく李祖傑の説とは合わない。また「四明遊戲主人」を『大系』は李伯元とするが、李伯元の籍貫は武進であって、「四明」ではない。ここは烏有先生に託したものか。なお『游戲報』に附送された小説には『海天鴻雪記』があるが、ほかにはそれほど有名な作品はない。

『海上繁華報』　これはすでに諸人が指摘するように『世界繁華報』の誤り。阿英「晩清小報錄」（『晩清文藝報刊述略』）は『世界繁華報』について次のように述べる。「據載記、『官場現形記』作者南亭亭長李伯元、嘗先後在上海辦過『指南報』、『游戲報』和『繁華報』。……『世界繁華報』出版最遲、時在光緒二十七年（一九〇一）。……也就在這十一箇年頭上、爲刊載吳娼蟾月樓事被控、葦叔遭逮捕、報也停了版。時間是庚戌年（一九一〇）三月十三日。……『繁華報』完全是一種所謂「消閑」的小型報紙、內容約分爲諷林、藝文志、野史、官箴、北里志、鼓吹錄、時事嬉談、譚叢、小說、論著諸類。對當日官場暴露、諷刺得很辛辣。……「藝文志」和「小說」却頗多名著、如李伯元的『官場現形記』、『庚子國變彈詞』、吳趼人的『糊塗世界』、都是刊載在這張小報上的。……「藝文志」…這很可以看到舊時的所謂「文人生涯」。「北里志」、每刊新聞兩則、往々用一回目、行文全用吳語。如「林黛玉前日往杭州、洪蕊初專員回上海」、「李翠蘭被罵、林鳳珠教歌」之類。此外、還有「梨園志」、「俳優傳」、「食譜」、「射虎錄」諸作。也有詩詞欄、題「文苑」…同樣反映了當時所謂「洋場才子」的生活。所刊諸作皆不題名、不知是否全爲李伯元箇人之作。……館址設大馬路泥城橋東億鑫里、日刊一張、先售七文、旋改八文、後又漲至一分。大小如現在大報一張之橫截半頁、四號字排、有廣告。」創刊は正確には光緒辛丑二十七年三月十九日（一九〇一年四月七日）、光緒三十二年（一九〇六）三月の李伯元の死後は、歐陽巨源任葦叔が發行を繼いだ。

『庚子國變彈詞』から『文明小史』までは、すでに異同で示したとおり、顧頡剛の紹介した趙氏の手紙に據って補われた部分だが、幾つか誤りがある。魏氏「箋注」は、世界

繁華報館版『海天鴻雪記』が六本ではなく四本であり、且つ同書が李寶嘉の傳記資料に一度も出現せず、初版の編者を「浙中二春居士編」とする所からこの書が果たして李寶嘉の手になるものかを疑う。また『繁華夢』は『海上繁華夢』であって、作者は孫玉聲、卽ち孫家振であることを考證し、李寶嘉は評を附けただけだとする（「『繁華夢』非李伯元著作考」『李伯元研究資料』）。なお魏氏は『李蓮英』を未見とする。趙景深『傍證』は「『李蓮英』一本、內容不多、述李蓮英在清宮專權的事。」と言うから現物を見た口吻にも取れるが、趙氏は多くを言わないので、その他は未詳。『活地獄』李寶嘉等撰。趙景深の「序」（一九五六年上海文化出版社）に據れば、嘗て單行されたことがなく、文化出版社版が初めてと言う。さすれば趙氏の手紙が「若干本」と言うのも載った雜誌の册數をいうのか或いは原稿の册子をいうのか、いずれにしろ不正確ではある。要するにこの部分の記述は顧氏紹介の趙氏の書信に據ったもので、魯迅自身實際に目睹したのではないだろう。これは次の『文明小史』と同じく『繡像小說』に連載され、李寶嘉の死で吳趼人が三回、歐陽巨源が一回を書き繼いで、計四十三回となったが、相變わらず未刊に終った。

『文明小史』六十回　李寶嘉が編輯を依託されていた商務印書館の『繡像小說』半月刊の癸卯（一九〇三）五月から乙巳（一九〇五）七月までに自ら載せたもの、翌年同じく商務印書館から單行本として出版された。清朝の官吏の腐敗墮落を糾彈するもので、阿英などは『官場現形記』よりも高く評價する。近刊には『繡像小說』に據る『中國近代文學大系』本（一九八九年江西人民出版社）、『李伯元全集』本（一九九七年江蘇古籍出版社）、中華書局重印本（二〇〇三年）等がある。

「寶嘉亦應商人之託、撰『官場現形記』」　魏紹昌の論文「『官場現形記』的寫作和刊行問題」（『李伯元研究資料』）は、『繁華報』に載った『官場現形記』の出版豫告と李寶嘉の知人宛ての手紙を證據として次のように言う。「我們從前一則出書預告中、可以知道『官場現形記』最初是在『繁華報』連載的、登完十二回報館就決定「先行刊印成書」、這便是『官場現形記』的初編。而『繁華報』的創辦人就是李

伯元自己（見周桂笙的『新庵筆記』和孫玉聲『退醒廬筆記』）、從李伯元委託朋友代銷此書并領受報費的信中、更可證明報館的發行工作、他自己都是親身參與的。因此李伯元寫作『官場現形記』、就是爲了給自己的報紙發表、出書、而不是「應商人之託」。而且爲了出版商翻印『官場現形記』的事、李伯元還和他們打過一場官司。」また氏の「箋注」でも「此處所謂〝應商人之託〟、〝擬爲十編〟、〝書遂不完〟等文字、魯迅均據李祖傑致胡適書中之言、據筆者所考、其實不確」とも言う。「書遂不完」は李祖傑の言か魯迅の言か不明だが、「擬爲十編」が本當なら五編出した時點で作者が死亡したのだから理の當然としてそうなる。しかしこれらの事情については確かに魏氏の考證の通りで、現存の全編が半部か全部かについても、魏氏の言うように五編六十回で完結したと見るのが妥當だろう。ただ李祖傑の手紙は今見ることができないから確實なことは言えないが、「以〝舖底〟售之商人」と言い、「應商人之託」と言うのを見ると、いささか引っ掛かるものがある。李寶嘉が『游戲報』の編輯を託したのは茂苑惜秋生つまり歐陽巨源である。そしてまた李寶嘉の『官場現形記』に「序」を書いたのも歐陽巨源である。その序で歐陽巨源は自分がその著を慫慂したのだと明らさまに書いてはいないけれども、『繡像小說』に連載の『文明小史』のような官場批判ものを『繁華報』にもと示唆したことがあったのではないか。というのは李寶嘉の親族がいう「商人」とは實は歐陽巨源ではないかと考えられるからである。それは李寶嘉の從弟李錫奇の口吻から窺える。彼は言う、「伯元既沒、……不意伯元所聘報館助手歐陽鉅源、恃其在館有年、熟悉內外情形、竟意圖把持侵占、以爲外人無從接洽。」（「李伯元先生生平事蹟大略」『李伯元研究資料』）李寶嘉の親族にしてみれば、歐陽巨源が李寶嘉の事業を横取りしようとしたのだと映り、事は孫菊仙の調停で收まったらしいが、彼がいくら李寶嘉と親しかったといえ、結局は面白からぬ人物であったに違いない。李祖傑は李錫奇以上に李寶嘉と年齡も近かったから一部始終は自分の眼で見ていたのだろうだから彼の手紙に言う「商人」とは、ただの商人ではなく、歐陽巨源を影射したもので、そこには明らかに貶意を含んでいると思わ

れる。以上はわたしの推測である。

孫菊仙（一八四一―一九三二）、天津市人、爲京劇鬚生名演員。魏氏「箋注」はそう注した上、一九一六年二月の『春聲』第二集に載った秋帆の「菊部軼聞」を引く。そこには「當李伯元主任『繁華』時、與菊仙最莫逆」と言う。ただ『繁華報』で孫菊仙を揄揚した事には及ばない。これも李祖傑の説に基づくものだろう。

『芋香印譜』　『芋香室印存』一冊が常州市博物館に收藏され、鈐印本であるという（魏氏箋注）。

經濟特科については、吳沃堯の「李伯元傳」も言うほか、魏氏「箋注」は次ぎのように述べる。「經濟特科、清末特設的考試科目。光緒二十七年辛丑（一九〇一）由內外大臣保薦各地人才、定癸卯（一九〇三）閏五月十六日在京舉行考典。薦李伯元者爲湘鄉曾慕濤侍郎（曾國荃之孫）、但爲御史周少樸（名樹模、湖北天門人、曾任副主考）所彈劾、疏中指控伯元〝文字輕佻、接近優伶〟。惟此舉未損害李伯元、因他本不願應召求官、當時就堅決辭却了。而且未到考期、他卽病故。」

『官場現形記』の著作と出版　『魯迅藏書目錄』にも日記や書帳にも著錄はないが、『史略』次節の記述から、魯迅は初刊本つまり『繁華報』掲載後、順次初編、二編、三編と書物になって、光緒三十二年正月完結刊行の繁華報館排印本三十册を見たのだと考えられる。彼は第三編（二十五回―三十六回）に附けられた「自序」（實は惜秋生、歐陽鉅源の序）の日附けが癸卯中秋であることから、光緒二十九年中に三編が成ったと考えたのであろう。しかしこれも魏紹昌の『繁華報』の實物を踏まえた考證に據ればいささか違ってくる。まず『官場現形記』が連載された時期の『繁華報』は九部しか現存しないが、そのうちの最も早い號、一九〇三年九月八日のものでは『官場現形記』はすでに連載第十三回で、最後の一九〇五年二月三日號では第四十九回である。そこから魏氏は一九〇三年四月に發表を始め、第六十回は一九〇五年六月ごろの該報に載って完結したと推測する。そして一九〇四年六月十七日號の、「『官場現形記』初編於癸卯九月出版、二編次年二月出版」という廣告によって、本になった時期を初編は一九〇三年九月

（新舊曆の換算によってこれは少し遅れて十月ごろになるはず）、續編は一九〇四年四月以前、三編は一九〇四年十一月以前と推定する。これに據れば少なくとも三編までの成書の時期を「光緒二十九年至三十年中成三編」と繰り下げねばならない。（魏紹昌「『官場現形記』寫作和刊行問題」『李伯元研究資料』）

『官場現形記』の版本全六十回が出揃ったのはすでに述べたように光緒三十二年正月（一九〇六年二月）の繁華報館本である。その後十六回が闕名氏によって附け加えられた粤東書局石印本（光緒三十年刊とするのは無論信が置けない）や、歐陽鉅源增注とする『增注繪圖官場現形記』崇文堂石印本（宣統元年一九〇九）等があり、中でも胡適の序をつけた亞東圖書館排印本が民國期を通じて廣く讀まれた。ごく近刊には張友鶴校注の人民文學出版社排印本の重印本（陝西人民出版社・天津百花文藝出版社版等）、繁華報館版による一九八九年江西人民出版社『中國近代小說大系』本、一九九七年江蘇古籍出版社『李伯元全集』本、冷時峻校點の二〇〇〇年上海古籍出版社中國古典名著叢書本などがある。

『師弟答問集』一〇四頁云、〔增田問曰〕、356頁1行　後以「舖底」售之商人、〔舖底〕＝店ノ土臺＝店ノ權利＝店ノ一切之支配權、經營權？　〔魯迅答曰〕、舖底トハ實ハ店ノ殘リデス。「售」トハ家屋（大抵ハ自分ノモノデナクテ、カリ屋）ノ造作一切、賣リ殘ッタ品物ヲ人ニ讓ルコト。看板ハ讓ヅルトキト讓ラナイトキアル。日本ノ「シニセ」トハ少シ違フラシイ　（魯迅のいう「シニセ」とは「かしみせ」を勘違いしたものか）

3『官場現形記』已成者六十回、以至如商界學界女界者亦接踵也　二八三十七

『大略』寫印本十七清之譴責小說云、『官場現形記』者、據其自序、似頗不以「捐班」爲然、然內容則兼及迎合鑽營、又刺士人之熱心于服官、與官吏閨中隱事。世多以爲據實直書、然其實頗有風影之談、誇大之事、不爲實錄、僅足圖快意、供談笑而已。作者本意、雖云深惡官場、惜觀察至爲淺薄、較之老殘游記、相去尙遠、蓋第有譴責之心、初無痛切之感、故言多膚泛、與慨然有作者殊科矣。其較爲平易近情

者如下。

『史略』各版間の異同　僅かに引用序文の最後の句の引號の場所が違うのみで、他に異同はない。「無不畢備也〃」は改訂版までは引用序文に忠實に「無不畢備〃也」であったが、改訂版で却って「也」字まで引用文とし、以後そのまま訂正されていない。元に戻すべきである。

「小說的歷史的變遷」第六講清小說之四派及其末流二諷刺派云、一直到了清末、外交失敗、社會上的人們覺得自己的國勢不振了、極想知其所以然、小說家也想尋出原因的所在。于是就有李寶嘉歸罪于官場、用了南亭亭長的假名字、做了一部『官場現形記』。這部書在清末很盛行、但文章比『儒林外史』差得多了。而且作者對于官場的情形也幷不很透徹、所以往々有失實的地方。

歐陽鉅元「官場現形記序」云、官之位高矣、官之名貴矣、官之權大矣、官之威重矣、五尺童子皆能知之。古之人、士農工商、分爲四民、各事其事、各業其業、上無所擾、亦下無所爭。其後選擧之法興、則登進之途雜。士廢其讀、農廢其耕、工廢其技、商廢其業、皆注意于官之一字。蓋官者、有士農工商之利、而無士農工商之勞者也。天下愛之至深者、謀之必善。慕之至切者、求之必工。于是乎有脂韋滑稽者、有夤緣奔競者、而官之流品、已極紊亂。限資之例、始于漢代、定以十算、乃得爲吏、開捐納之先路、導輸助之濫觴、所謂衣食足而知榮辱者、直是欺人之談、歸罪孝成、無逃天地。夫振飢出粟、猶是游俠之風、助邊輸財、不遺忠愛之末。乃至行博奕之道、擲爲孤注、操販鬻之行、居爲奇貨、其情可想、其理可推矣。

沿至于今、變本加勵、凶年饑饉、旱干水溢、皆得援救助之例、邀奬勵之恩、而所謂官者、乃日出而未有窮期、不至充塞宇宙不止。朝廷頒汰淘之法、定澄敍之方、天子寄其耳目于督撫、督撫寄其耳目于司道、上下蒙蔽、一如故舊。尤其甚者、假手宵小、授意私人、因苞苴而通融、緣賄賂而解釋、是欲除敝而轉滋之弊也、烏乎可。

且昔亦嘗見夫官矣、送迎之外無治績、供張之外無材能。忍饑渴、冒寒暑、行香則天明而往、禀見則日昃而歸、卒不知其何所爲而來、亦卒不知其何所爲而去。袁隨園之言曰、當其雜坐戲謔、缺伸假寐之時、卽鄉城老幼毀肢折體而待訴

之時也。當其修垣轅、治供具之時、卽胥吏舞文匿案而逞權之時也。怵目惕心、無過于此。而所謂官者、方鳴其得意、視爲榮寵。其爲民作父母耶。抑爲督撫作奴耶。試取問之、當亦啞然失笑矣。不寧惟是。田野不辟、訟獄不理、則置諸不問。應酬或缺、孝敬或少、則與之爲難。大府以此責下吏、下吏以此待大府。論語曰、上有好者、下必有甚焉者矣。易曰、上行下效、捷于影響。執是言也、官之所以爲官者、殆可想像得之。

暴秦之立法也、幷禁腹誹。有宋之覆國也、以廢淸議。若官者、輔天子則不足、壓百姓則有餘。以其位之高、以其名之貴、以其權之大、以其威之重、有語其後者、刑罰出之、有誚其旁者、拘系隨之。明達之士、豈故爲寒蟬仗馬哉。懾之于心、故愼之于口耳。其意若曰、是固可以賈禍者。我旣不系社稷之輕重、亦無關朝廷之安危。官雖苛暴、而無與我之身家。官雖貪黷、而無與我之資產。則亦聽之而已矣、又何必拂其心而攖其怒乎。

于是、官之氣愈張、官之焰愈烈。羊狠狼貪之技、他人所不忍出者、而官出之。蠅營狗苟之行、他人所不屑爲者、而官爲之。下至聲色貨利、則嗜若生命。般樂飲酒、則視爲故常。觀其外、俛規而錯矩、觀其內、逾閑而蕩檢。種種荒謬、種種乖戾、雖罄紙墨不能書也。得失重、則妬忌之心生、傾軋甚、則睚眦之怨起。古之人、以講學而分門戶、以固位而立黨援、比比然也。而官則或因調換而齟齬、或因委署而齮齕、所謂投骨于地、犬必爭之者、是也。其柔而害物者、且出全力以搏之、設深心以陷之、攻擊過于勇夫、蹈襲逾于強敵。宜其知己知彼、百戰百勝矣。而終不免于報復者、子輿氏曰、殺人父者、人亦殺其父、殺人兄者、人亦殺其兄。戰國策曰、蟷螂捕蟬、不知黃雀之在其後。卽此類也。天下可惡者莫若盜賊、然盜賊處暫而官處常。天下可恨者莫若仇讎、然仇讎在明而官在暗。吾不知設官分職之始、亦嘗計及乎此耶。抑官之性有異于人之性、故有以致于此耶。國衰而官強、國貧而官富。孝弟忠信之舊、敗于官之身。禮義廉耻之遺、壞于官之手。而官之所以爲人詬病、爲人輕褻者、蓋非一朝一夕之故、其所由來者漸矣。

南亭亭長有東方之諧謔、與淳于之滑稽、又熟知夫官之齷齪卑鄙之要凡、昏瞶糊塗之大旨。欲提其耳、則彼方如巢許

之掩之而走、欲唾其面、則彼又如師德之使其自干。因喟然嘆曰、昔嚴介溪敬禮能作古文之人、人或訝之。介溪愀然曰、我輩他日定評、在其筆下。是知古今來大奸大惡、天變不足畏、人言不足恤、而惟窃窃焉以身後爲憂、是何故哉。蓋猶未忘耻之一字也。佛家之論因果、曰過去、曰未來、曰現在。過去之耻、固若存而若亡。未來之耻、亦可有而可無。而現在之耻、則未有不思浣濯之以滌其汚、彌縫之以泯其迹者。且夫訓教者、父兄之任也。規箴者、朋友之道也。諷諫者、臣子之義也。獻進者、矇瞽之分也。我之于官、既無統屬、亦鮮關係、惟有以含蓄蘊釀存其忠厚、以酣暢淋漓闡其隱微、則庶幾近矣。窮年累月、殫精竭神、成書一帙、名曰官場現形記。立體仿諸稗野、則無鉤章棘句之嫌。紀事出以方言、則無詰屈聱牙之苦。開卷一過、凡神禹所不能鑄之于鼎、溫嶠所不能燭之以犀者、無不畢備。曹孟德得陳琳檄而愈頭風、杜子美對張良傳而浮大白、讀是編者知必有同情者已。光緒癸卯中秋後五日、茂苑惜秋生。江西人民出版社中國近代小說大系本

この序文の、殊に最後の一段など書きかたが曖昧なところがある。「南亭亭長有東方之諧謔、與淳于之滑稽」などと言いながら、一方では「我之于官、既無統屬、亦鮮關係云々」と書いて、まるで『官場現形記』は自分が書いたと言わんばかりである。魯迅が不用意にこの序を「自序」としたのもある程度は無理はない。しかし『小說舊聞鈔』では周桂笙の『新庵筆記』の「丙午三月、徵君赴修文之召、惜秋生歐陽巨源繼之。」という部分までを引きながら、『大略』寫印本の時點ですでに「自序」としている。何かの思い込みがあったに違いない。なお惜秋生が李伯元でないことについては、阿英が「惜秋生非李伯元化名考」で明かにしている。

「已成者六十回、爲前半部」とするのは、前節に「擬爲十編、編十二回」とあることの當然の歸結であるが、最終第六十回の末に次のような記述があるのもその一因である。

「……只見那人的背後走過一个人來、拿他拍了一下、說聲：〃伙計！快去校對你的書罷。校完了好一塊兒出去吃飯。〃那人聽罷此言、馬上就跑進去。不多一刻、裏面忽然大喊起來。但聽得一片人聲說：〃火！火！

火！〃隨後又看見許多人、抱了些燒殘不全的書出來、這裏頃刻間火已冒穿屋頂了。一霎時救火的洋龍一齊趕到、救了半天、把火救滅。……又聽見那班人回來、圍在一張公案上面、查點燒殘的書籍。查了半天、道是：他們校對的那部書、只剩得上半部。原來這部教科書、前半部是專門指摘他們做官的壞處、好叫他們讀了知過必改、後半部方是教導他們做官的法子。如今把這後半部燒了、只剩得前半部。光有這前半部、不像本教科書、倒像个『封神榜』、『西遊記』、妖魔鬼怪、一齊都有。他們那班人因此便在那裏商議說：〃總得把他補起來才好。〃內中有一个人道：〃我是一時記不清這些事情、就是要補、也非一二年之事。依我說：還是把這半部印出來、雖不能引之爲善、却可以戒其爲非。況且從前古人以半部『論語』治天下、就是半部亦何妨。倘若要續、等到空閑的時候再續。諸公以爲如何。〃衆人躊躇了半天、也沒有別的法子可想、只得依了他的說話、彼此一哄而散。……――是爲『官場現形記』、前半部終。」江西人民出版社中國近代文學大系本

いかにも出版社の火事で後半部が燒失したように見せかけている。しかしこれは魏紹昌が前掲「寫作和刊行時期的問題」で言うように、全卷終結の宣言であり、これで續があるとするのは、作者の技巧的トリックに嵌ったものと考えるのが正當だろう。『史略』の記述は普段の魯迅に似ず「擬爲十編」に拘われた誤讀と言えよう。

胡適「五十年來中國之文學」第九章云、我們先說李伯元（常州人、事蹟未詳）的『官場現形記』。這部書先後共出了六十卷、全數不連貫的短編紀事連綴起來的。全書的體例與方法、最近『儒林外史』。『儒林外史』罵的是儒生、『官場現形記』罵的是官場。『儒林外史』裏還有幾個好人、『官場現形記』裏簡直沒有一個好官。著者自己說、他那部書是一部做官教科書、前半部是專門指摘他們做官的壞處、好叫他們讀了知過必改。後半部方是教導他們做官的法子。如今把這後半部燒了、只賸得前半部。光有這前半部、不像本教科書、倒像部『封神榜』『西遊記』、妖魔鬼怪一齊都有。（第六十卷）其實當時官場的腐敗已到了極點、這種材料遍地皆是、不過等到李伯元方才有這一部窮形盡相的「大淸官

國活動寫眞」出現、替中國制度史留下無數絕好的材料。這部書的初集有光緒癸卯年（一九〇三）茂苑惜秋生的序、痛論官的制度。（略序、見本篇本節引）『官場現形記』的主意只是要人人感覺官是世間最可惡又最下賤的東西。（略卷四・卷八・卷十四引文）李伯元除了『官場現形記』之外、還有一部『文明小史』、也是「儒林外史式」的諷刺小說。『胡適文存』二集卷二

又云、南方的諷刺小說都是學『儒林外史』的。『儒林外史』初刻于乾隆時、後來雖有翻刻本、但太平天國亂後、這部書的傳本漸漸少了。亂平以後、蘇州有活字本、『申報』的初年有鉛字排本、附有金和的跋語、及天目山樵評語。自此以後、『儒林外史』的通行遂多了。但這部書是一種諷刺小說、頗帶一點寫實主義的技術、既沒有神怪的話、又很少英雄兒女的話。況且書裏的人物又都是「儒林」中人、談什麼「擧業」「選政」、都不是普通一般人能了解的、因此、第一流小說之中、『儒林外史』的流行最不廣、但這部書在文人社會裏的魔力可眞不少。一來呢、這是一種創體、可以作批評社會的一種絕好的工具。二來呢、『儒林外史』用的語言是長江流域的官話、最普通、最適用。三來呢、『儒林外史』沒有布局、全是一段一段的短編小品連綴起來的。拆開來、每段自成一篇。鬥攏來、可長至無窮。這個體裁最容易學、又最方便。因此、這種一段一段沒有總結構的小說體就成了近代諷刺小說的普通法式。　同上

4 今錄南亭亭長之作八百餘言爲例、以至（第二十六回）

二八四十三

『史略』各版間の異同　最初の「却說賈大少爺」の「却」字、『大略』鉛印本では「且」に作るが、初版で「却」に改めた。ここは原文諸本いずれも「且」に作るから『大略』鉛印本の舊に戻すべきである。「雖然請教過多少人」の「少」字、諸本になく、『大略』鉛印本にないが、初版で加えられた。これも削るべきである。「賈大少爺忙分辨道」の「辨」字、原文では「辯」に作るが、これは『大略』鉛印本から現行全集まですべて誤っている。「倘不問」三字、『大略』鉛印本は「倘若不問」に作り、諸本は「倘若問不着」に作る。

『官場現形記』引用部分についての異同　この部分、繁

華報館再版本、民國□年群學社本、人民文學出版社本、繁華報館本に據ったという江西人民出版社中國近代小說大系本を用いて對校した。その結果例になく一致しない部分が多い。「不庸細述」の「庸」字、諸本みな「容」字に作る。「才有帶領引見的司官老爺把他帶了進去、不知走到一个甚麽殿上、司官把袖一份」「有」字、群學社本は「有」に作るが、他本は「由」に作る。「他」下、諸本みな「們」字あり。「不知」下、諸本みな「道」字あり。「袖」下、諸本「子」字あり。「當時引見了下來、先看見華中堂」「引見了」繁華報館本は「引了見」と顚倒するが、これは他の諸本みな正す。次句は諸本「先見着華中堂」に作る。「明日朝見」の「朝」字、群學社本は「朝」に作るが、他本みな「召」に作る。「一席話說得賈大少爺」「席」字、繁華報館本・群學社本は「夕」字、人民文學本・大系本は「席」に作る。「說得」の「得」字、みな「的」に作る。「你見過中堂沒有？」各本「中堂」上に「華」字あり。「他平生最講究養心之學」「平生」二字、諸本顚倒して「生平」に作る。「被同寅中都看穿了」諸本「同寅中」を「同寅當中」に作る。「寒暄了幾句」の「幾」字、諸本みな「兩」に作る。「便題到此事」の「題」、諸本「提」に作る。「不必碰的時候」、諸本「不應得碰頭的時候」に作る。「只得又退了下來」、諸本「又只得退了下來」に作る。このように異同が多い理由は未詳。或いは引用に近いテキストがあるのか、これまた未詳。

『師弟答問集』一〇四頁云、〔增田問曰〕、360頁　最初の行　送他一個外號、叫他做「琉璃蛋」　〔琉璃蛋〕＝ガラス玉→看穿サレルカラガラス玉カ？　〔魯迅答曰〕、no　ガラス玉デス。ツルツルスベッテ把握ノ出來ナイモノ、要領ヲ得ナイ、狡猾ナモノ

又云、〔增田問曰〕、359頁　最終ノ行　最講究養心之學　ドンナ學問デセウ？　〔魯迅答曰〕、ドンナコトアッテモ、心ガ動カナイ工夫。詰リ道學デス。

又一〇八頁云、〔增田問曰〕、番外

A　道班

道臺　道臺トハ官名デスカ？　〔魯迅答曰〕、yes

or　民間カラ尊稱シテ呼ブ名デスカ？　〔魯迅答

曰〕、no

民間デハ道臺ト云フガ實際、政府カラハソンナ官名ヲ出シテ居ナイ？〔魯迅答曰〕、no　出シテ居マス。

「道」ト云ヒマス

B

A大老爺（父）

A大少爺（子）――コレハ父ノ長子ニ限リマスカ

〔魯迅答曰〕、yes

〔増田問曰〕、又ハ次子、三子デモA大少爺ト云ヒマスカ　〔魯迅答曰〕、no

或ハ二子ナラA二少爺

三子ナラA三少爺――トハ云ヒマセンカ？

〔魯迅答曰〕、yes　ソー云フ風ニ云ヒマス。

5 我佛山人爲吳沃堯、以至『我佛山人小說箚記』等　二八五―六

『大略』寫印本にはこの部分に該當する記述がない。

『史略』各版間の異同　「光緒二十八年新會梁啓超…」の「八」字を、『大略』鉛印本から三十八年版全集まですべて「九」に作り、五十七年版全集で始めて正された。「三十二年」の「二」字も同じく三十八年版全集まですべて「三」に誤る。「年四十五（一八六六―）」の「五」と「六六」も同じく「四」「六七」に誤る。年齢を誤った理由は後の魏紹昌の指摘に見える。『大略』鉛印本では『我佛山人筆記四種』が羅列された著作の最後に來るが、初版で現行の如くになる。

ここの記述全體については、魏紹昌に詳しい箋注がある（魏紹昌編『吳趼人研究資料』一九八二年上海古籍出版社）。

『小說舊聞鈔』引『新世說』四云、吳趼人自號我佛山人、神宇軒然、望而知爲高逸之士、惟目甚短視。每有所著述、下筆萬言、不加點竄、然恒以靜夜爲之、昧爽乃少休。以酒爲糧、或逾月不一飯。（吳名沃堯、廣東南海人、光緒時以小說名於滬。）

又引『新菴筆記』三云、『滌菴叢話』載：「曾見某報刊婁西任庸子投函云、〃吳研人先生、小說巨子、其在橫濱則著『痛史』、在歇浦則作『上海游驂錄』與『怪現狀』、識者敬之。不意其晚年作一『還我靈魂記』、又何說也？因作輓聯曰百戰文壇眞福將、十年前死是完人。評說確切、蓋棺定論、

研人有知、當亦俯首矣。〃」云々。案趼人元字繭人、某女士爲畫扇、誤署繭仁、趼人嗜曰、〃殪蠶我矣！〃亟易爲趼人、蓋繭趼音同也。『滌菴叢話』竟體誤作研人、則滌菴、庸子二子之所以知吳趼人者、亦云僅矣。趼人性疆毅、平生不欲下人、坐是坎壈沒身、死而有知、詎俯首於此一二無聊之語、吾知其必不然矣。趼人先生及余皆嘗任横濱新小說社譯著事、自滬郵稿、雖後先東渡日本、然別有所營、非事著書也。其在滬所成小說、無慮三十餘種、『遊驂錄』、『怪現狀』特九牛之一毛。且所著因人因地因時、各有變態、觸類旁通、輒以命筆、一無成見、而文章自臻妙境。其爲讀者敬愛、詎止此三作乎哉？不可與言而與之言、失言、先生爲市儈作『還我靈魂記』、猶是失言之過。所作酬應文字、類此者不知凡幾、殆亦文人通病、烏得以咎趼人？是記別闢蹊徑、惜天不永年、遂使此藥與斯文同腐、於先生何憾焉。同時日報主筆如病鴛、雲水、玉聲諸君、且受庸藥肆劇場、專事歌頌、則又何說？古之人有爲文諛墓以致重金者、今人獨不可以諛藥邪？『還我靈魂記』甫脫稿、市儈立奉三百金以去。先生卽資以壽老母、開筵稱觴、名流畢集。李懷霜先生嘗爲駢儷之文、慶其有古稀現存、刊載『天擇報』、信而有徵。爲人子者苟同此心、何必前死十年、始爲完人？夫完人界說、亦至泛濫。將以功業蓋世、聲施爛然、無纖毫芝疵病者爲完人乎？則凡人之所難、趼人非其類也。將以鄉□自好、無毀無譽者爲完人乎？則趼人怒目翕張、不屑爲也。瑕瑜互見、則非完人、則勢必胥納天下之人於僞君子之塗而後可、是豈趼人先生之所自許哉？余知趼人最稔、不得不寫其眞以告滌菴、庸子。其行誼、則懷霜先生『我佛山人傳』言之綦詳、不更贊一辭。

又引汪維甫「我佛山人筆記序」云、南海吳趼人先生以小說名於世、每有撰述、無不傾動一時。余於淸黃所丙午丁未之際、創刊『月月小說』延先生主筆政。此報頗有名、後未幾、先生卽歸道山、報亦停刊。先生著述、以『二十年目睹之怪現狀』一書爲最著、固婦孺能道之。其他零星文字、散逸不收、市上有拾其遺稿爲之刊布者、曰『趼廛筆記』、曰『我佛山人箚記小說』、約數種。或自報紙采錄、或且雜以僞作、要非先生所樂爲刊布者也。……民國四年三月、休寧汪維甫序。

吳趼人「近十年之怪現狀自敍」云、吾人幼而讀書、長而入世、而所讀書、終不能達于用、不得已、乃思立言以自表、抑亦大可哀已。況乎所謂言者、于理學則無關于性命、于實學則無補于經濟、技僅雕蟲、談恣捫虱、俯仰人前、不自顏汗。嗚呼、是豈吾讀書識字之初心也哉。雖然落拓極而牢騷起、抑鬱發而叱咤生、窮愁著書、寧自我始。夫呵風雲、撼山岳、奪魂魄、泣鬼神、此雄夫之文也、吾病不能。至若態蟲魚、評月露、寫幽恨、寄纏綿、此兒女之文也、吾又不屑。然而憤世嫉俗之念、積而愈深、卽砭愚訂頑之心、久而彌切、始學爲嬉笑怒罵之文、窃自儕于譎諫之列。猶幸文章知己、海內有人、一紙既出、則傳鈔傳誦者、雖經年累月、猶不以陳腐割愛。于是乎始信文字之有神也。愛我者謂零金碎玉、散置可惜、斷簡殘編、掇拾匪易、蓋爲連綴之文、使見者知所寶貴、得者便于收藏、亦可藉是而多作一日之遺留乎。于是始學爲章回小說。計自癸卯始業、以迄于今、垂七年矣、已脫稿者、如借譯稿以衍義之電術奇談（見橫濱新小說、已有單行本）、如恨海（單行本）、如劫餘灰（見『月月小說』）、皆寫情小說也。如九命奇寃（見橫濱新小說、已有單行本）、如發財祕訣、如上海游驂錄（均見『月月小說』）。如胡寶玉（單行本）、皆社會小說也。兼理想科學社會政治而有之者、則爲新石頭記（前見『南方報』近刻單行本）。其未脫稿者不與焉、短篇零拾亦不與焉。嗟夫。以二千五百餘日之精神歲月、置于此詹詹小言之中、自視亦大愚矣。竊幸出版以來、咸爲閱者所首肯、頗不寂寞。然如是種種、皆一時興到之作、初無容心于其間。惟二十年目睹之怪現狀一書、部分百回、都凡五十萬言、借一人爲總機捩、寫社會種種怪狀、皆二十年前所親見親聞者、慘淡經營、歷七年而猶未盡殺青。蓋雖陸續附印、已達八十回、餘二十回、稿雖脫而尙待討論也。春日初長、雨窗偶暇、檢閱稿末、不結之結。二十年之事迹已終、念後乎此二十年之怪狀、其甚于前二十年者、何可勝記。既有前作、胡勿賡續。此念纔起、卽覺魑魅魍魎、布滿目前、牛鬼蛇神、紛擾□〔腦〕際。入諸記載、當成大觀。于是略採近十年見聞之怪劇、支配前後、分別棄取、變易筆法（前書系自記體、此易爲傳記體）厘定顯晦、日課如干字、以與喜讀吾書者、再結一翰墨因緣。

周桂笙『新菴筆記』又云、吳門悅庵主人沈習之先生敬學、

嘗任端方祕書。吳趼人先生、一日赴寧造訪、悅庵觴之于秦淮畫舫、陪座有某君者、亦督幕中人、性好滑稽、過夫子廟、誤踐遺矢、故忍不言、比登舟始蹺足示人曰、是亦六朝金糞也。衆爲絕倒。此趼人悅庵親爲余言之。嘗幾何時、趼人于庚戌九月十九日、遽作古人。逾年悅庵隨節鄂渚、余馳書爲趼人乞哀挽之辭、悅庵作詩哭之。今聞悅庵亦于民國紀元九月二十九日下世、實舊曆壬子八月十九日也。適後趼人一年少一月、而得春秋四十有四則同、有子皆相殤、坎壈以沒、亦無不同。嗚呼、抑何相値之巧邪。載筆至此、泣涕如雨。

魏紹昌編『吳趼人研究資料』

「年二十餘至上海」　『史略』が何に據ってこう記したのかは未詳。魏氏箋注「據『趼廛筆記』中「星命」一條、〝辭歲喧笑、殊無病狀〟、至〝新歲初六夕、陡得暴病、初七辰刻卒〟。癸未是一八八三年、據此吳趼人十八歲時已在上海。」と十八歲の時にすでに上海に居たことを言う。その後裴效維は「吳趼人赴滬謀生時間考」（『清末小說から』第六十二號・二〇〇一年一月）を書き、新しく發見された「還我魂靈記」に「吾生而精神壯足、未弱冠、卽出與海內士大夫周旋」とあるのを指摘し、小說中の自評や描寫等の狀況證據から十八歲說を主張する。これらの說はまだ檢討の餘地はあると思われるが、いずれにせよ魯迅が「二十餘至上海」と書いたのは、新たな確證が出ない限り定說とするわけには行かない。

「又爲『指南報』作『新石頭記』」　前掲の「近十年之怪現狀自敍」に見られるように『新石頭記』は『指南報』ではなく『南方報』に掲載された。魏紹昌の「魯迅之吳沃堯傳略箋注」（『吳趼人研究資料』）はこの件につき「『新石頭記』幷非在『指南報』發表、原載在上海『南方報』、自一九〇五年九月十九日的第二十八號起開始連載、至一九〇八年二月一日該報停刊爲止、小說尙未登完。『新石頭記』全文四十回、當年由上海改良小說社出版單行本。」と言う。また丁錫根「『中國小說史略』箋補拾零」（『紀念魯迅誕生一百周年論文集』復旦大學出版社刊）もほぼ同じことを述べる。ただし魯迅が何故誤ったかは未詳である。單に紛らわしい誌名であったからと考えるのが案外正解かも知れない。

「廣志小學校」　魏氏箋注は周桂笙『新菴譯屑』に付した

吳趼人自身の序を引いて言う。「去冬（指光緒三十三年丁未卽一九〇七年之冬季—魏紹昌）同鄉君子、組織旅滬廣志小學校成、交推余主持其事、于是日與二三同事、研究教育之道、舍學校而外、幾無復涉足之處。」（全文は魏氏『資料』に見える）

「年四十五（一八六六—一九一〇）」　これを『大略』鉛印本より三十八年版全集に至るまで「年四十四（一八六七—一九一〇）」に作った理由について、魏氏箋注は次のように述べる。「吳趼人在同治五年丙寅四月十六日（公曆一八六六年五月二十九日）、誕生于北京宣武門外賈家胡同其祖父寓所、……魯迅當時誤引『新菴筆記』中「六朝金糞」一條說趼人〝得春秋四十有四〟一語、把生年誤算爲一八六七年、阿英的『晚淸小說史』以及他人後來編寫的幾本文學史中、均因而誤記。一九五七年新版的『中國小說史略』中、已豫更正。」

『趼人十三種』　短篇小說十一種と『趼廛剩墨』『趼廛詩刪剩』の二種を合わせたもの。他人が編集したものかどうかは未詳だが、この書は『史略』が擧げる五種のうち唯一作者生前の宣統元年七月に上海の群學社より出售されたもので、『月月小說』からの抽印合訂本である。のち宣統二年にも上海の匯通印局の版本がある。

「還我魂靈記」　上海中法大藥局が賣りだした藥のための宣傳廣告文で、『史略』は「文亦不傳」と言うが、今では發見されて見ることができる（魏紹昌編『吳趼人研究資料』）。全集注では、一九一〇年七月二十二日の『漢口中西報』に載ったと言うが、これはおそらく一例で他にも各地の新聞に載った可能性がある。魏氏『資料』は吳趼人の寫眞附きの新聞の紙影を收錄している。なお『史略』その他も「魂靈」を「靈魂」と顚倒しているが、これは吳趼人の「魂靈」という言葉が漢語として熟さないためであろう。

6　『二十年目睹之怪現狀』以至僅足供閑散者談笑之資而已

二八六＋十二

『大略』寫印本十七云、二十年目睹之怪現狀所敍之範圍較大、作者之經歷亦較深、故文意亦視官場現形記爲繁變、惜其敍述過于巧合、亦多附會而已。其書始于童年雜事、而至末無結束、僅就見聞遭遇綴以成篇。書之開端卽作〝亦因我

出來應世的二十年中、回頭想來、所遇見的只有三種東西。第一種是蛇蟲鼠蟻、第二種是豺狼虎豹、第三種是魑魅魍魎。〃則全書一百八回之主旨、在專刺此類人物可也。惟以事多異常、故譴責之力每頓減。

『史略』各版間の異同　「坎坷沒世」の「坷」字、『大略』鉛印本より三十八年版全集まですべて「呵」字に作り、五十七年版全集で現行となる。

「小說的歷史的變遷」第六講清小說之四派及其末流云、二、諷刺派……嗣後又有廣東南海人吳沃堯歸罪于社會上舊道德的消滅、也用了我佛山人的假名字、做了一部『二十年目睹之怪現狀』。這部書也很盛行、但他描寫社會的黑暗面、常常張大其詞、又不能穿入隱微、但照例的慷慨激昂、正和南亭亭長有同樣的缺點。這兩種書都用斷片湊成、沒有甚麼線索和主角、是同『儒林外史』差不多的、但藝術的手段、却差得遠了。最容易看出來的就是『儒林外史』是諷刺、而那兩種都近于謾罵。

諷刺小說是貴在旨微而語婉的、假如過甚其辭、就失了文藝上底價值、而它的末流都沒有顧到這一點、所以諷刺小說從『儒林外史』而後、就可以謂之絕響。

『二十年目睹之怪現狀』　魯迅が見た版本は、その書き振りからすれば、光緒・宣統間に刊行された原刊である上海廣智書局排印本かとも思われるが、それにしては記述が正確ではなく、結局何に據ったのかは未詳。『藏書目錄』、日記、書帳等にも著錄はない。目睹の可能性があるのは、今のところ原刊本の他、民國五年南溪吳瑞棠石印本、同年石庵序のついた上海新小說社石印本、又民國十一年以前刊行の世界書局本である。版本となる以前、この作品は梁啓超主編の『新小說』に公表された。その第八號（光緒二十九・一九〇三）―十五・十七―二十四（同三十一・一九〇五）までに四十五回分掲載された。同誌は二十四號で停刊になったので、その事に關しては『史略』の記述どおりである。原刊の廣智書局本の刊行は、魏氏『資料』によれば、

甲卷　一回―十五回　光緒三十二年二月
乙卷　十六回―三十回　同年四月
丙卷　三十一回―四十五回　同年九月
丁卷　四十六回―五十五回　同年十二月

戊卷　五十六回—六十五回　同年同月
己卷　六十六回—八十回　宣統元年三月
庚卷　八十一回—九十四回　宣統二年八月
辛卷　九十五回—一百八回　同十二月

となっていて、戊卷から己卷まで丸二年の空白があるが、そのことはともかく、ここの『史略』の刊行時期についての記述は明らかに誤っている。その理由は不明。

「亦販舊作、以爲新聞」　原注の『鍾馗捉鬼傳』の出典に關して中島利郎「第二十八編〝清末之譴責小說〟について」（『呀啞』特刊一九八七年三月）に次のような指摘がある。「ここでの魯迅の注記は、『二十年目睹之怪現狀』第六回中の貧窮旗人の燒餅を食べる狀が、明の烟花山人の作と傳えられる『鍾馗捉鬼傳』第四回から採られていることを指している。尙、『北京周報』第68號（一九二三・六・三）の周樹人・周作人「〝面子〟と〝面錢〟」という談話の中や、林語堂の『北京好日』（日文題）にも『怪現狀』の話を踏まえて同じ話が見える。」

『二十年目睹之怪現狀』引用の一文を、『史略』は「第一回」と注するが、管見では各版本第一回はすべて楔子で、引用の一文は第二回にある。楔子を第一回と數えて全一百八回だし、次に引く符家の話の「第七十四回」という注記はその通り第七十四回にあるから、ここはやはり「第二回」の誤りで、正すべきである。

「相傳吳沃堯性疆毅」云々、前項**5**所引の周桂笙『新菴筆記』三を參照。

胡適「五十年來中國之文學」第九章云、吳沃堯、字趼人、是廣東南海的佛山人、故自稱「我佛山人」。當梁啓超在日本創辦『新小說』時、吳沃堯的『二十年目睹之怪現狀』（以下省稱『怪現狀』）的第一部分就在『新小說』上發表。那個時候、——光緒癸卯甲辰（一九〇三—四）——大家已漸漸的承認小說的重要、故梁啓超辦了『新小說』雜誌、商務印書館也辦了一個『繡像小說』雜誌、不久又有『小說林』出現。文人創作小說也漸漸的多了。『怪現狀』、『文明小史』、『老遊記』、『孽海花』……都是這個時代出來的。『怪現狀』也是一部諷刺小說、內容也是批評家庭社會的黑幕。但吳沃堯曾經受過西洋小說的影響、故不甘心做那沒有

結構的雜湊小說。他的小說都有點布局、都有點組織。這是他勝過同時一班作家之處。『怪現狀』的體例還是散漫的、還含有無數短篇故事。但全書有個「我」做主人、用這個「我」的事跡做布局綱領一切短篇故事都變成了「我」二十年中看見或聽見的怪現狀。卽此一端、便與『官場現形記』『文明小史』不同了。

但『怪現狀』還是『儒林外史』的產兒。有許多故事還是勉強穿牂插進去的。後來吳沃堯做小說的技術進步了、他的『恨海』與『九命奇寃』便都成了有結構有布局的新體小說。『恨海』寫的是婚姻問題。（中略）這兩層悲劇的下場、在中國小說裏頗不易得。但此書敍事頗簡單、描寫也不很用氣力、也不能算是全德的小說。

『九命奇寃』可算是中國近代的一部全德的小說。他用百餘年前廣東一件大命案做布局、始終寫此一案、很有精彩。（中略）他用中國諷刺小說的技術來寫家庭與官場、用中國北方強盜小說的技術來寫強盜與強盜的軍師、但他又用西洋偵探小說的布局來做一個總結構。繁文一概削盡、枝葉一齊掃光、只剩這一個大命案的起落因果做一個中心題目。有了這個統一的結構、又沒有勉強的穿插、故看的人的興趣自然能自始至終不致厭倦。故『九命奇寃』在技術一方面要算最完備的一部小說了。『胡適文存』二集卷二

7 其敍北京同寓人符彌軒之虐待其祖云、以至（第七十四回）　二八七＋一

『大略』寫印本での引用は現行本と同じ部分だが、引用の量は少ない。「那老頭子低着頭哭、」より「只怕腦子也磕出來了」まで、その間にもかなりの省略がある。但し「符太太只管拿骨頭來逗叭兒狗頑」の「逗」下に「着」字があり、また「幸虧站着的老媽子……」の「站着」の前には「旁邊」二字がある。これらは原文各版にもあるから、『大略』鉛印本で增補した際に落ちたもので、その後補われていない。『史略』各版の異同は、「又靜了一陣」の「了」字『大略』鉛印本では脫落、「安分守己」の「己」字、合訂二版から第六版まで「已」に誤る。その他「罵句了一回」の「句」を三十八年版全集以前のテキストはすべて異體字の「彀」字に作る。同樣に「桌」字は「棹」字に作る。

8 吳沃堯之所撰著、以至（見『新庵譯屑』評語）云

「自云是寫情小說」　『近十年之怪現狀』（本篇5所引）二八八－一一　參照。

この部分は『大略』鉛印本で增補されたもので、寫印本にはこれに該當するものがない。『史略』各版間の異同は、「『新菴筆記』三」の「三」を三十八年版全集以前はすべて「五」に作る。「因人、因地」も「因地、因人」と轉倒する。また「『新庵譯屑』」の「屑」字も同じく「叢」字に作る。これらは五十七年版全集で『新庵筆記』の現物によって正されたと思われる。『新庵譯屑』は周桂笙の翻譯八十九篇を集めたもので、のち彼の隨筆と合わせて『新庵筆記』として民國三年八月上海の古今圖書局より出版されたことが知られるが、いま見ることができないので確認はできない。『新庵筆記』は吳趼人の編輯で序も書いている。周桂笙（一八七三―一九三六）は淸末民初の文學・兒童文學の翻譯家。『新庵諧譯初編』は翻譯童話集、短篇には『新庵五種』『新庵九種』があり、探偵物に『毒蛇園』等がある。吳趼人とは上海移住以來の友人で、汪慶棋（維甫）が創刊した『月月小說』に吳趼人と共に招かれて第八期まで譯述や編集に當ったという。

吳趼人「新庵譯屑」『自由結婚』評語云、趼人氏曰、余與譯者論時事、每格格不相入、蓋譯者主輸入新文明、余則主恢復舊道德也。吾國舊道德、本完全無缺、不過散見各書、有出于經者、有出于子者、未匯成專書、以供研究耳。誠能讀破萬卷、何求弗得。中古賤儒、附會聖經、著書立說、偏重臣子之說、而專制之毒愈結而愈深。晚近士者、偏重功利之學、道德一塗、置焉而弗講、遂漸淪喪。而恰當此歐風東漸之際、後生小子、于祖國古書、曾無一斑之見、而先懾于強國、謂爲其文明所致、于是見異思遷、盡忘其本。嗚呼、抑何妄也。不寧惟是、彼之于祖國古書、曾無一斑之見者、其于他人精華之籍、所得幾何、從可知矣。舍我之本有而取諸他人、不問精粗美惡、一律提倡、輸進之精者美者庶猶可、奈之何幷粗惡而進也。雖然、此猶曰失于審擇耳。其尤甚者、則專爲自私自利計。如談自由而及于結婚、其語乃盡出于少年輩、稍老成者、必不肯言。其故果安在也。彼談自由者、徒嘵嘵然曰自由自由、曾未聞有一研究自由之範圍、自由之

法律者。審如是也、則深山大澤之中、有最自由之一物焉、曰龍蛇豺虎、公等何不從之游也。是故講自由者、一及于範圍法律、則必有大不有自由者在（歐美最重自由、而與人晉接之頃、有未識其姓名者、雖晉接再三、非有介紹、不得率行叩問。此吾國人刻不可耐者也。舉此小事、以概其餘）。公等日以自由之聲聒人耳、而曾不肯一講範圍法律、公等謂非借此爲自私自利計、雖蘇張來辯、吾不爲屈也。

且夫輸進文明云者、吾非欲拒絕而禁遏也。第當善爲審擇云爾。以余觀之、彼之文明、彼自以爲文明耳、而認其爲文明與否、其權在我。對于一瑣事之微、尙當審辨其是非、而論定之。矧此關于全國之學術思想者。顧乃作一犬吠影、群犬吠聲之舉動乎。況風俗禮教對于社會習慣性質、有密切之關係、必欲盡毀我之所有以從人、公等或優爲之、全社會未必盡能爲也。

吾今存一說焉、以俟諸公之定斷。其說維何。則凡學他人者、必先得其短處是也。猶臆吾束髮授書時、蒙師教我讀、字未嘗識也、而師年老多欬病、吾退塾時、殊不復臆字之能識與否、而必作傴僂狀以學蒙師之欬。吾少年曾學爲畫矣、六法未諳、東塗西抹、不能成一幅、而筆研狼藉、硃粉滿案、且及于唇面之間、種種畫師之醜態畢呈、甚且過之。家人見之而笑、始聳然而自慚也。吾又曾游于大江南北、暨燕齊吳越之間矣。在在方言不同、非互學不能相通、然以此地之人、學彼地之語者、未必遂能操其語、而彼地冒人之詞、必先學得之。此其明徵也。公等新少年、歷歲月幾何矣。窺他人之學術幾何歲月矣。姑勿論有自私自利之心、卽曰無之、而所學果何如矣。金聖嘆先生之序『西廂』也、其言曰、「現見其父中年無歡、聊借絲竹、陶寫懷抱也、不晌眼而其子手執歌板、沿門唱曲、若是乎謝太傅亦愼勿學也。現見其父憂來傷人、願引聖人、托于沈冥也、不晌眼而其子罵座被驅、墜車折脇、若是乎阮嗣宗亦愼勿學也。現見其父家居多累、竹院尋僧、略商古德也、不晌眼而其子引諸髡奴汚亂中冀、若是乎張無垢亦愼勿學也。現見其父希心避世、物外田園、方春勸耕也、不晌眼而其子擔糞服牛、面目黧黑、若是乎陶淵明亦愼勿學也。」金氏之言、蓋戒人愼于造因也。彼所擧者、其因非盡不良、而結果皆惡、若是乎審擇之不可不愼也。公等動言輸入文明、吾不敢菲薄公等、吾且崇拜公等爲中國造

因之英雄、然而其審擇愼諸。其審擇愼諸。

今之恃譯西籍而圖輸入文明者亦多矣。何不亦如周子之譯此條。擇其短者、亦表白于我國人、俾得有所審擇耳。周子譯此篇竟、持來商榷、喜其與余之見同也、亟書此歸之。此說一出、亦知必多唾罵攻擊者、然而非所恤矣。　魏氏『吳趼人研究資料』所引全文。

9 又有『老殘遊記』二十章、以至自『老殘遊記』始也

二八八－六

『大略』寫印本十七云、『老殘遊記』二十章、題洪都百鍊生著、實丹徒劉鐵雲作也。鐵雲名鶚、精算術、究治河、後以主張開山西礦、世商稱之漢奸、聯軍入京、鐵雲以賤價購倉粟賑飢民、事平以爲盜買、流新疆死。其書借鐵英卽號老殘者之游行、而歷記其聞見言論、筆墨雖遠遜儒林外史、且多敍作者之信仰、而攻擊官吏之處亦多。如第十六章記剛弼誤認魏氏父女爲謀斃一家十三命重犯、魏氏管家行賄圖免、而剛弼以此證實之、摘發所謂淸官者之可恨、雖作者亦甚自憙、以爲「贓官可恨人人知之、淸官大可恨、人多不知、蓋贓官自知有病、不敢公然爲非、淸官則自以爲不要錢、何所不可、剛愎自用、小則殺人、大則誤國、吾人親目所覩、不知凡幾矣。試觀徐桐李秉衡、其顯然者也。……歷來小說皆揭贓官之惡、有揭淸官之惡者、自老殘遊記始」也。前有光緒丙午（三十二年）序。

『史略』各版間の異同　「〝洪都百煉生〟著」の「煉」字を三十八年版全集まですべて「鍊」字に作る。また「著」字は第六版まで引號の中にあったが、改訂版で外に出されて現行となる。その他に異同はない。

致增田涉信三二〇五二二云、老殘遊記一本　第四から第五回までの分は「ユーモア」と思はれたものでしょーと思ふが併し支那に於いては事實です。

「老殘遊記自序」云、嬰兒墮地、其泣也呱呱。及其老死、家人環繞、其哭也號咷。然則哭泣也者、固人之所以成始成終也。其間人品之高下、以其哭泣之多寡爲衡。蓋哭泣者、靈性之現象也、有一分靈性、卽有一分哭泣、而際遇之順逆不與焉。

馬與牛、終歲勤苦、食不過芻秣、與鞭策相終始、可謂辛苦矣。然不知哭泣、靈性缺也。猿猴之爲物、跳擲於深林、

厭飽乎梨栗、至逸樂也、而善啼。啼者、猿猴之哭泣也。故博物家云、猿猴、動物中性最近人者、以其有靈性也。古詩云、巴東三峽巫峽長、猿啼三聲斷人腸。其感情爲何如矣。

靈性生感情、感情生哭泣。哭泣計有兩類。一爲有力類、一爲無力類。癡兒騃女、失果卽則（衍？）啼、遺簪亦泣。此爲無力類之哭泣。城崩杞婦之哭泣、竹染湘妃之淚。此（爲）有力類之哭泣也。（而）有力類之哭泣、又分兩類。以哭泣爲哭泣者、其力尙弱、不以哭泣爲哭泣者、其力甚勁、其行乃彌遠也。

「離騷」爲屈大夫之哭泣、莊子爲蒙叟之哭泣、「史記」爲太史公之哭泣、「草堂詩集」爲杜工部之哭泣、李後主以詞哭、八大山人以畫哭、王實甫寄哭泣於「西廂」、曹雪芹寄哭泣於「紅樓夢」。王之言曰、「別恨離愁滿肺腑、難陶曳、除紙筆、代喉舌、我千種想思向誰說？」曹之言曰、「滿紙荒唐言、一把辛酸淚、都云作者癡、誰解其中意。」名其茶曰、「千芳一窟」、名其酒曰、「萬艷同杯」者。千芳一哭、萬艷同悲也。

吾人生今之時、有身世之感情、有家國之感情、有社會之感情、有種敎之感情。其感情愈深者、其哭泣愈痛。此洪都百鍊生所以有『老殘遊記』之作也。

棋局已殘、吾人將老、欲不哭泣也得乎。吾知海內千芳、人間萬艷、必有與吾同哭同悲者焉。　天津孟晉書社用天津日日新聞版印刷本（據樽本照雄『老殘遊記資料』景印）、參用民國十四年十二月亞東圖書館初版本

いまふつうに見られる「老殘遊記序」は、いささか字句の省繁はあるものの皆右の文にほぼ同じである。右の文には日附けは記されない。『史略』がいう「有光緒丙午（一九〇六）之秋于海上所作序」もおそらくは同文であろう。『劉鶚及老殘遊記資料』（劉德隆・朱禧・劉德平編　一九八五年・四川人民出版社）は右の文を引いて注に「部分版本、有〝丙午之秋洪都百煉生作于海上得秋氣齋〟之署名」と言う。『魯迅藏書目錄』は

老殘遊記　劉鶚著　吳齊仁標點　一九二二年上海泰東圖書局　再版

と著錄する。樽本照雄「『老殘遊記』の版本と修改について」（『淸末小說閑談』一九八三年法律文化社）は民國四年上海

文藝書室本について、その版本一覧表の備考に自序を「丙午之秋」と注記し、解説では泰東圖書局本は、文藝書室本ないしは新小説社本を承けたものだと言う。但し泰東本には自序がないから、魯迅は上海文藝書室本を見たのであろう。少なくとも樽本氏の版本一覧表では、『史略』の成稿までの版本で自序に年月が注記されるのはこれ一本である。「末數回乃其子續作之」説　未詳。趙景深が一九三五年に書いた「『老殘遊記』及其二集」にも「有人説、『老殘遊記』正集後數章是他人續作的、象十三條生命都活了轉來、帶有超自然的色彩、自然是破壞了寫實局面的統一。但第十九章寫推牌九一段、繪聲繪色、却是可以稱贊的。」（『中國小説叢考』五三〇頁）とは言うが、その「有人」が誰であるかは言わないし、また氏の『傍證』も「『老殘遊記資料』沒有〝末數回乃其子續作〟這類的話」と言うのみである。

羅振玉「五十日夢痕錄」乙卯二月二十九日云、予之知有殷墟文字、實因丹徒劉君鐵雲、鐵雲振奇人也。後流新疆以死、鐵雲交予久、其生平事實、不忍沒之、附記其略于此。君名鶚、生而敏異、年未逾冠、已能傳其先德子恕觀察成忠之學、精疇人術、尤長于治河。顧放曠不守繩墨、而不廢讀書。予與君同寓淮安、君長予數歲。予少時固已識君、然每于衢路聞君足音、輒逡巡避去、不欲與君接也。是時君所交皆井里少年、君亦薄世所謂規行矩步者、不與近。已乃大悔、閉戶斂迹者歲餘、以歧黃術游上海、而門可羅爵、則又棄。而習賈盡傾其資、乃復歸也。光緒戊子、河決鄭州、君慨然欲有以自試、以同知往投效于吳恒軒中丞、中丞與語奇之、頗用其說。君則短衣匹馬、與徒役雜作。同僚所畏憚不能爲之事悉任之、聲譽乃大起、河決既塞、中丞欲表其功績、則讓與其兄渭清觀察夢熊、而請歸讀書、中丞益異之。時方測繪三省黃河圖、命君充提調官。河圖成時、河患移山東。吾鄉張勤果公曜方撫岱、方吳公爲揚譽、勤果乃檄君往東河。勤果故好客、幕中多文士、實無一能知河事者、群議方主賈讓不與河爭地之說、欲盡購濱河民地、以益河身。上海善士施少卿善昌和之、將移海內賑災之欵、助官購民地。君至則力爭其不可、而主束水刷沙之說、草治河七說上之。幕中文士、力謀所以阻之、苦無以難其說。時予方家居與君相聞也。憂當世之所以策治河者如是、乃箸論五千餘言、以明其利害、

欲投諸施君、揭之報紙、以警當世。君之兄見而大韙之、錄副寄君。君見予文、則大喜。乃以所爲治河七說者郵君之兄以詒予、且附書曰、君之說與予合者十八九、羣盲方競、不意當世尚有明目如公者也。但尊論文章淵雅、非肉食者所能解、吾文直率、如老媼與小兒語。中用王景名、幕僚且不知爲何代人、烏能讀揚馬之文哉。時君玩世不恭尚如此。歲甲午、中東之役起。君方丁內艱歸淮安、予始與君相見、與君預測兵事。時諸軍皆扼守山海關、以拱京師。予謂東人知我國事至熟、恐陽趨關門而陰擣旅大、以覆我海軍、則我全局敗矣。儕輩聞之、皆相非難。君之兄且引法越之役法將語、謂旅大難拔、以爲之證。獨君意與予合、憂旅大且旦夕陷也。乃未久竟驗、于是同儕皆擧予與君、齒謂二人者智相等、狂亦相埒也。君既服闋、勤果卒官、代之者福公潤以奇才薦、乃徵試于京師、以知府用君。于是慨然欲有所樹立、留都門者二年、謂扶衰振敝、當從興造鐵路始、路成則實業可興、實業興而國富、國富然後庶政可得而理也。上書請築津鎭鐵路、當道頗爲所動、事垂成、適張文讓公請修京鄂線、乃罷京鎭之議。而君之志不少衰、投予書曰、蒿目時艱、當世之事、百無一可爲。近欲以開晉鐵、謀于晉撫、俾請于朝。晉鐵開、則民得養、而國可富也。國無素蓄、不如任歐人開之、我嚴定其制、令三十年而全鑛路歸我。如是則彼之利在一時、而我之利在百世矣。予答書曰、君請開晉鐵所以謀國者則是矣。而自謀則疏、萬一幸成、而蒐菲日集、利在國、害在君也。君不之審、于是事成、而君漢奸之名、大噪於世。庚子之亂、剛毅奏君通洋、請明正典刑。以在滬上幸免。時君方受廩于歐人、服用毫侈、予亟以危行遠害規君。君雖韙之、不能改也。聯軍入都城、兩宮西幸、都人苦饑、道甫相望。君乃挾資入國門、議振卹。適太倉爲俄軍所據、歐人不食米、君請於俄軍、以賤價盡得之、糶諸民、民賴以安。君平生之所以惠于人者、實在此事。而數年後、柄臣某乃以私售倉粟罪君、致流新疆死矣。當君說晉撫胡中丞奏開晉鐵時、君名佐歐人、而與訂條約。凡有損我權利者、悉託政府之名以拒之、故久乃定約。及晉撫入奏言、官乃交劾、廷旨罷晉撫、由總署改約。歐人乘機、重賄當道、凡求之晉撫不能得者、至是悉得之、而晉鑛之開、乃眞爲國疾矣。嗚呼、賣國以自利世所詬、爲漢奸者且不忍爲、而當道竟悍然爲之。勢不至

辛亥之變、舉三百年祖宗之天下而併售之。不止君既受竊鉤之誅、而彼賣祖宗之天下者、且安榮如故也。然則莊生之言、甯爲過乎。至於君既受廩于歐人、雖顧惜國權、卒不能剖心自明于人。在君烏得爲無罪而其所以致此者、則以毫侈不能自潔之故、亦才爲之累也。噫、以天生才之難、有才而不能用、執政之過也。懷才而不善自養、致殺身而喪名、吾又焉能不爲君疚哉。書畢爲之長歎。『羅雪堂全集』本第三編

胡適「五十年來的中國之文學」第九章云、和吳沃堯・李伯元同時的、還有一個劉鶚、字鐵雲、丹徒人、也是一個小說好手。劉鶚精通算學、研究治河的方法、曾任光緒戊子（一八八八）鄭州的河工、又曾在山東巡撫張曜的幕府裏、作了治河七策。他住北京兩年、上書請築津鎭鐵路、不成。又爲山西巡撫與英國人訂約開採山西的鑛。當時人都叫他做「漢奸」、因爲他同外國人往來、能得他們的信用。後來拳匪之亂（一九〇〇）聯軍佔據北京、京城居民缺乏糧食、很多餓死的。他就帶了錢進京、想設法賑濟。那俄國兵佔住太倉、太倉多米而歐洲人不吃米。他同俄國人商量、用賤價糶給北京的居民、救了無數的人。後數年、有大臣參他「私售倉粟」、把他充軍到新疆、後來他就死在新疆。二十多年前、河南彰德府附近發見了許多有古文字的龜甲獸骨、劉鶚是研究這種文字最早的一個人、曾印有『鐵雲藏龜』一書。（以上記劉鶚的事蹟、全據羅振玉的「五十日夢痕錄」。我因爲外間知道他的人很不多、故摘鈔大概于此。）

劉鶚著的『老殘遊記』、與李伯元的『文明小史』同時在『繡像小說』上發表。這部書的主人老殘、姓鐵、名英、是他自己的託名。書中寫的風景經歷、也都帶着自傳的性質。書中的莊撫臺卽是張曜、玉賢卽是敏賢。論治河的一段也與羅振玉作的傳相符。書中寫申子平在山中遇着黃龍子璵姑一段、荒誕可笑、錢玄同說他是「老新黨頭腦不甚清晰的見解」眞是不錯。書末把賈家寃死的十三人都從棺材裏救活回來、也是無謂之至。但除了這兩點之外、這部書確是一部很好的小說。他寫玉賢的虐政、寫剛弼的剛愎自用、都是很深刻的。大概他的官場經驗深、故與李伯元吳沃堯等全是靠傳聞的、自然大不相同了。他寫娼妓的問題、能指出這是一個生計問題、不是一個道德的問題、這種眼光也就很可佩服了。他寫史觀察（上海施善昌）治河的結果、用極具體的寫法、

使人知道誤信古書的大害（第十三回至十四回。）這是他平生一件最關心的事、故他寫的這樣眞切。

但『老殘遊記』的最大長處在於描寫的技術。（中略）第十二回寫老殘在齊河縣看黃河裏打氷一段、寫的更爲出色。最好的是看打氷那天晚上、老殘到堤上閑步、

抬起頭來、看那南面山上一條白光、映着月色、分外好看。一層一層的山嶺、却分辨不清。又有幾片白雲在那裏面、所以分不出是雲是山。及至定睛看去、方才看出那是雲那是山來。雖然雲是白的、山也是白的、雲有亮光、山也是有亮光。只爲月在雲上、雲在月下、所以雲的亮光從背後透過來。那山却不然、山的亮光由月光照到山上、被那山上的雪反射過來、所以光是兩樣了。然只稍近的地方如此。那山望東去、越望越遠、天也是白的、山也是白的、雪也是白的、就分辨不出來了。

只有白話的文學裏能產生這種絕妙的「白描」美文來。『胡適文存』二集卷二　二八九－一〇

10『老殘遊記』引用文

寫印本『大略』も同じ部分を引く。但し「底下差役」の後の「炸雷似的答應了一聲〝嗄！〟」十字がない。

11『孽海花』以光緒三十三年載于『小說林』、以至當日之作風固如此矣　二九〇－八

寫印本『大略』一六清之狹邪小說云、孽海花一卷未完、作者自稱東亞病夫、未知實何人。孽海花者、謂北京名妓賽金花也。賽金花、本名傅彩雲、侍郎洪鈞使英國、挈之去、號爲夫人、生一女。後鈞死、乃復至上海爲妓、又轉之天津、仍曰賽金花、名甚噪。孽海花專敍洪傅佚事、而清末瑣聞亦錯出其中、且寫當時名士習氣頗極刻露、蓋已甚有掊擊社會之意矣。

寫印本『大略』成稿の時點では、『孽海花』に關する敍述は以下に引く蔣瑞藻の『小說考證』にほぼ據っている。そして『小說考證』の記述に限定されて魯迅はこれを「狹邪小說」の末尾に入れた。後に「譴責小說」に入れるように、「已甚有掊擊社會之意矣」と述べているが、これも『小說考證』の「闕名筆記」の記述から導かれたものと考える。この時點で、『江蘇』所載の第一・二回はともかくとして、まだ『孽海花』小說林社版二十回本を讀んでいなかったと

考えてよい。

『史略』各版間の異同　「愛自由者發起」の「發起」は、鉛印本『大略』より第六版まで「起發」に作り、訂正版で「發起」となった。これは一九〇五年原刊本に據ったと稱する晩清文學叢鈔二卷本も、中國近代文學大系小說四集本（上海書店版）說明も「愛自由者起發」に作るから、魯迅が目覩したものも刊行年は不明ながら小說林社本と考えられる。他には「李滋銘字蘊客」六字が、鉛印本『大略』より第六版までなく訂正版で加えられた。

「在山泉詩話」云、京都名妓賽金花、原名傅彩雲、洪文卿侍郎鈞、攜之使泰西、生一女。洪卒於都、彩雲復之滬、名曹夢蘭。流轉之京、又更名賽金花。樊雲門方伯增祥、爲譔彩雲曲、於其一生歷史、搜括無遺。原稿散見於津滬各報、因錄之、俾與欲知狀元夫人歷史者談跬跡。（中略）近人譔『孽海花』說部、專記侍郎與金花佚事、關係時局興亡、可與此詩互徵也。

瑞藻按：『孽海花』說部、余少時曾讀一過、然第一卷已下、不復續出。嘗戲語友人、東亞病夫、殆眞病矣。以其書之佳妙、頗以未窺全豹爲憾。天琴先生近復有後彩雲曲一篇、卽記賽金花庚子後事者、不妨且作「後孽海花」讀。其詩膾炙人口、洛陽紙貴、今不具錄。惟前曲原有序數百言、「老蘭君詩話」略而不載、補記於此。爲讀「孽海花」者資印徵焉。「傅彩雲者、蘇州名妓也。年十三、依姉居滬上、跬名噪一時。某學士銜恤歸、一見悅之、以重金置爲箑室、待年於外。……會學士持節使英、萬里鯨天、鴛鴦並載。既至英、六珈象服、儼然敵體。英故女王、年垂八十、雄長歐洲、尊無與並。彩出入椒風、獨與抗禮。嘗偕英皇並坐照像、時論奇之。學士代歸、從居京邸、與小奴阿福、姦生一女。學士逐福留彩、寖與疏隔。俄而文園消渴、竟夭天年。彩故與他僕私、至是遂爲夫婦。居無何、私蓄略盡、所懽亦阻、仍返滬爲賣笑計、改名曰賽金花。蘇人公檄逐之、轉之津門、雖年逾三十、而跬名不減疇昔。（後略）」『小說考證』卷八「孽海花」上海古籍出版社本

「闕名筆記」云、近人小說、以東亞病夫『孽海花』爲最著。全書以名妓賽金花爲主、而清季三十年之遺聞軼事、網羅無

遺。描寫名士習氣、如禹鼎鑄奸、如溫犀照渚、尤爲淋漓盡致。（後略）同上

『史略』の『孽海花』に關する記述には問題があることは、中島利郎「魯迅の『中國小說史略』第二十八編「清末之譴責小說」について」（『伊啞特刊』一九八七年）で提起されたのが最初であろう。ただそれによって問題が解決されたわけではないので以下にわたしの見解を述べることにするが、それに先立ち『孽海花』の出版狀況について概觀しておく。

『孽海花』は金天翮（一八七四―一九四七、江蘇吳江人、清末の革命家、文筆家）が書き始めたもの、最初の二回は留日學生江蘇同鄕會の雜誌『江蘇』第八期（一九〇三年十一月）に駒驎の筆名で載った。のち曾樸らが小說林社を創設したので、金天翮は第六回までの原稿をそこに持ち込み、曾樸がそれに手を入れ、二十回までを續作した。そして一九〇五・六年に各十回、二編を二刷排印本として小說林社から刊行した。「歷史小說」と銘打ち、「愛自由者起發、東亞病夫編述」とする。「愛自由者」とは金天翮の筆名、「東亞病夫」は曾僕のそれである。（この二十回本は民國初年に上海の有正書局から再版された。）その後一九〇七年（光緒三十三年）に雜誌『小說林』を出した曾樸は、その第一期に二十一回、二十二回、第二期に二十三回、二十四回、第四期に二十五回の計五回を載せたが、そこで中絕した。この部分は第二十五回を除いて、民國五年上海望雲山房から第三編として出版された。さらに十年あまり後一九二八年曾樸は舊作に手を入れ、三十回までを續作し、自分の經營する眞美善社から出版。この三十回が以後『孽海花』の定版として普及する。曾樸はさらに雜誌『眞美善』に三十一回から三十五回までを連載するが、これは彼の生前には書物とならなかった。一九五九年中華書局が眞美善書店三十回本を底本とし、三十一―三十五回を附錄として刊行した。以上が『孽海花』刊行のあらましである。そのうち『史略』の成稿に關るのは、時間的には望雲山房第三編本までであるが、『史略』の記述からすれば、實際には雜誌『小說林』掲載部分までだと考えられる。

『史略』が「『孽海花』以光緒三十三年載于『小說林』、稱〝歷史小說〟、署〝愛自由者發起、東亞病夫編述〟。」と

述べるのは、その限りでは別に語弊はない。光緒三十三年の雑誌『小說林』の第一、二期、四期には確かに『孽海花』が〝歴史小說〟と銘打ち、〝愛自由者起發（第一期は〝發起〟に作る）、東亞病夫編述〟と稱して連載された。但しそこに載ったのはすでに述べたように第二十一回から二十五回までであって、『史略』がのちに述べる「旋ち合輯して書十卷、僅かに二十回と爲る」の小說林社版『孽海花』ではない。しかし書き出しの『孽海花』は文脈からして當然小說林社版二十回本でなければならない。二十回本からは本篇12に第十九回の一部分を引用するし、雜誌『小說林』はそこに載った黄人の「小說小話」全文を魯迅は『小說舊聞鈔』に寫し入れているから、『小說林』を見たことも確實である。したがってここの記述には思い違いによる混同がある。

次いで小說の梗概である。「金沟謂吳縣洪鈞……勢甚張。」という部分は、小說の梗概ではなく、小說『孽海花』の本事である。賽金花の主人である金雯青が死ぬのは第二十回までにはなく漸く第二十四回になってからである。そして傅彩雲が「復赴上海爲妓、稱曹夢蘭」となるのは第二十九回で、この回は『史略』出版後に執筆公表されたから、『史略』の記述には直接の關係はない。さらに傅彩雲が天津に行くのは三十回本にも出ず、後に續作された第三十五回までにも記載がない。したがって庚子事變のワルデルゼーはむろん登場しない。二十回本第一回の回目で、登場人物たちの行狀が歴史事實に沿って相當明白に豫定されているけれども、作品そのものはそれを途中までしかトレースしていない。小說史で小說そのものを記述の對象とするのに、いくらモデル小說とはいえ、その梗概を本事でもって代替するわけには行くまい。これは思うに、まだ作品そのものを讀んでいなかった寫印本『大略』成稿時に、『小說考證』から『孽海花』の本事を引いた餘波であろう。此の部分はそう解釋するより解決がつかない。

著者の曾樸について　曾樸の履歴等が明らかになるのはもう少しあとで、『史略』成稿當時は籍貫と字のほかにはほとんど情報がなかったらしく、傳聞で書かれている。現在では子息曾白虛の「曾孟樸先生年譜未定稿」（いま魏紹昌

編『孽海花資料』一九八二年・上海古籍出版社に收錄）、それに他のさまざまな資料を參照して編みなおした時萌編「曾樸生平繫年」、「曾僕著譯考」（ともに『曾僕研究』一九八二年・上海古籍出版社收錄）があり、その生涯の全貌が明らかになった。上記兩書に收められたその他の資料や研究論文も曾僕理解に資する所がある。ただ曾僕の追悼文で胡適が言及した「那封六千字的自敍傳的長信」はこの二書にも收錄されていないが、『胡適文存』第三集に「論翻譯」と題して收めるこの文章は、曾僕の傳記を考える上で見逃せないものである。（吉川幸次郎先生が「曾僕氏の翻譯論」全集十六で紹介されたことがある）。

「後似欲以豫想之革命收場」とするのは、第一回に記された六十回全目の最後が「專制國終攖專制禍　自由神還放自由花」であることからの類推である。ただ後の三十回本になるとこの全目をも含めて大幅な削除があり、第一回はすでに楔子の役割りを失している。

12 卽引爲例、以至（第十九回）　二九一＋七

『師弟答問集』一〇六頁云、〔增田問曰〕、369頁　7行　戶部員外補＝缺？一千年。戶部＝財政部、員外＝名バカリデ役ノツカナイ官名、ツマリ、戶部ノ員外ニ一千年モ補闕（就官）シテ居ルト云フコトハアリ得ベカラザルコトデ、要スルニ無官ヲ自嘲自尊シタシャレ？　〔魯迅對「闕＝缺？」答曰〕、yes　〔又對「戶部＝財政部」答曰〕、yes〔又抹消「（就官）シテ居ルト云」補以〕シナイカモ知ラント云　〔又抹消「ハ、アリ得ベカラザルコトデ」補以〕デ　〔「要スルニ」下補以〕官アテモ　〔「無官」下補以〕ト等シイコト　〔又抹消「？」而補以〕デス。〔欄外總括曰〕、戶部員外ハ官名。戶部官ノ職ハ定員アルモノデスカラ、ソノ職ガアクト（死ヌカ昇進スルカ）、「員外」タルモノハ順序ニソノアイタ職ニツク、ソレヲ「補缺」ト云フ。「補缺一千年」＝「補缺スルニハ一千年カカル（待タナケレバナラナイ）」ト云フ意味デ何時ニ實職ニツクコトガ解ラナイコトデス

又〔增田問曰、同頁〕、9行　秋葉式的洞門。〔問秋葉式〕〔魯迅描繪其形而答曰〕、芭蕉ノ葉ラシイ形、馬鹿ナ形デス。ソノ形ハ芭蕉カラ來タモノダト思フ。

又〔增田問曰〕、370頁　1行　淡墨羅巾燈畔字　小風鈴佩夢中人　羅巾ニ書カレタ字ガ淡墨デアル？　羅巾デ燈ガツクッテアル？　〔魯迅對前者答曰〕、yes　〔對後者曰〕、no　〔增田又問小風鈴曰〕、小ナル風鈴？or小風ニ鈴ヲ佩ス？　〔魯迅對前者曰〕、yes　〔對後者曰〕、no　〔魯迅欄外曰〕、淡墨デ羅巾ノ上ニ書イタ（字）ハ燈畔（書イタ）字、小イ風ニ吹カレテ鈴佩ガチリン〳〵ト鳴ッテ居ルモノハ夢ノ中ニマデ見ュ人（＝イツモ記憶シテ居ル人）

魯迅は「小ナル風鈴」に「yes」と答えていささか不安であったので欄外に説明したのだろう。増田氏の問いはともに要領を得ない。

同一〇八頁云、〔增田問曰〕、370頁　最末　一路躡手躡脚的進來　そろそろ徐々に？　〔魯迅答曰〕、no　〔增田問曰〕、「チョコチョコト小走リニ急イデ」ト解釋スル字書モアリマスガ、コレハ間違ヒト思ヒマス、少クトモコノ場合ニハ適合シナイヤウデス。〔魯迅答曰〕、yes　〔欄外又曰〕、手モ足モ音ヲサセナイ、何ノ音モタタセナイ、詰リヒソカニ這入ッテ主人ニ知ラセナイ爲メデス。ソコニハ惡戲ノ分子ヲ含ンデ居ル。

13『孽海花』亦有他人續書（『碧血幕』『續孽海花』）、皆不稱。　二九二―六

「侗生叢語」云、『孽海花』爲中國近著小說。友人謂此書與『文明小史』、『老殘遊記』、『恨海』、爲四大傑作。顧『孽海花』能包羅數十年中外事實爲一書、其線絡有非三書所及者。其筆之詼諧、詞之瑰麗、又能力敵三書而有餘。惜印行未半、忽然中止。天笑生承其意、爲『碧血幕』一書、文筆優美、與『孽海花』伯仲、未數回亦止。神龍一見、全豹難窺、見者當有同慨也。『小說考證』拾遺。

『續孽海花』はその名の通り他人による續作だが、包天笑の『碧血幕』の評價についてはともかく、それが續作だということについての記述は「侗生叢語」に據ったことは明かだろう。包天笑は後に「釧影樓筆記」の中の一文で次のように書いている。

「關於『孽海花』」云、清末時代、曾孟樸創辦小說林社于上海、我與徐念慈諸君、都擔任編輯事宜。當時孟樸倡議編寫近代歷史小說、恰巧留日學生所出版的『江蘇』雜誌上、

載有金松岑所撰的『孽海花』小說、讓于孟樸續寫、于是我們三人約定、孟樸寫『孽海花』、專紀清季京朝士夫的種種遺聞軼事。徐念慈寫東三省紅胡子以及那時組織義勇軍事、定名『遼天一却記』。我擔任寫清季革命黨事、題未定。且約定三書可蟬聯相接。三人中、我最年青、故排列最後。我那時也想以一個人物爲中心、于是就把中國的革命女傑秋瑾爲中心、寫了幾回、題目名爲『碧血幕』。可惜三人都沒有完卷、孟樸的『孽海花』、共寫成三十五回、而經過了三十年的光陰。念慈的『遼天一却記』、幷未刊出、已經逝世了。我的『碧血幕』、本登載在『小說林』雜誌中的、而『小說林』也停刊、因此大家也就擱筆了。（後略）（『孽海花資料』、原載『小說月報』第十五期、一九四一年十二月出版。又收於『中國近代文學論文集』小說卷。）

包天笑の『碧血幕』は『小說林』第六期から第九期にかけて四回連載されて中止になり、書物として刊行されることはなかった。（但し近刊には一九九六年百花洲文藝出版社の中國近代小說大系本がある。）魯迅は『小說林』でこの作品を讀んでいたはずだから、評價の「不稱」はその印象から來るのだろう。しかしこれが『孽海花』の續作でないことは一讀明らかで、『史略』の粗漏という他ない。

『續孽海花』は陸士諤の作で、最初宣統元年（一九〇九年）に小說改良社から十二回二卷が『新孽海花』という名で出版され、民國元年（一九一二年）に第二十一回至六十二回が大聲圖書局から、また『孽海花續編』という名で同じく第三—六集二十一回至六十二回が同年に啓新振記圖書局、又國民小說社から刊行された。これら三社の關係は未詳。以上『清末民初小說目錄』に據る。但し第十三回から二十回、つまり第二集に相當する部分はどこにも著錄されず、目錄類からは不明。この書は回目を曾樸が第一回に示した通りとしたので、後に訴訟沙汰となり發禁處分を受けた。（一九八九年中國文聯出版公司の中國新文藝大系參考叢書に十二回本と合訂で收錄された。）なお『續孽海花』という書名では曾樸の同意を得て、友人の張鴻が三十一回より六十回までを書き、雜誌『眞美善』に連載後、一九三四年同書店より刊行されたが、むろん『史略』の記述には關わらない。近刊には臺灣世界書局本（一九五七・六四年）や黑龍江人民

出版社本（一九八二年）等數種がある。

14 此外以抉摘社會弊惡自命、以至則遂墮落而爲〝黑幕小說〟　二九二―四

寫印本『大略』一七云、此外以抉剔社會弊惡爲目的而作者尙多、大抵摸倣先出之作、且無以勝于後二書〔『官場現形記』『二十年目睹之怪現狀』〕、亦有蔑人而自誇者、氣韻尤卑下。又或雖有訶斥之志、而無抒寫之才、則遂墮落而爲黑幕小說。

又云、然中國之譴責小說有通病、卽作者雖亦時人之一而本身決不在譴責之中、儻置身局內、則大抵爲善士、猶他書中之英雄、若在書外、則當然爲旁觀者、更與所敍弊惡不相涉、於是「嬉笑怒罵」之情多、而共同懺悔之心少、文意不眞摯、感人之力亦遂微矣。

後者は寫印本『大略』では、この第十七章の最初、「譴責小說」の說明に續いて述べられていることだが、鉛印本『大略』では削られて見えない。しかし魯迅の認識としては相變わらず生きていると思われるので、總括の部分であるここに補う。

『史略』各版間の異同　「譙呵之文」の「呵」字、通用するが三十八年版全集まですべて「訶」に作る。他に異同はない。

「此類小說」については、阿英『晚淸小說史』の該當部分を參考までに擧げておく。

『晚淸小說史』第三章云、以上敍述全面的描寫晚淸社會的小說盡。從這裏面不難看到、當時的政治社會、究竟腐敗破爛到了怎樣程度。而崩潰覆滅的預言、在每一部裏、都預示着。（中略）其他類此的作品尙多、或不完、或不足稱、只能從略。就所見、有報癖『新舞臺鴻雪記』、石窗山民『新乾坤』、抽斧『新鼠史』、燕市狗徒『中國進化小史』、見『月月小說』、除後一種外、皆不完。有鐵漢『臨妝鏡』、載『小說林』、荒江釣史『月球殖民地小說』、載『繡像小說』。成册的、有遁廬的『當頭棒』（樂群版、一九〇八）、新中國之廢物『刺客談』（鴻文版、一九〇八）、佚名『新舊社會之怪現狀』（改良版）、『呆子孫』（國民社）、湘西夢藝生『傷心人語』（振聯書社、一九〇六）、陸士諤『新中國』（改良小說社、一九一〇）、睡獅『馬鹿世界』（小說進步社、一九

一一)、東亞破佛『泡影錄』(破佛維航處、一九〇六)、山外山人『枯樹花』(小說新書社、一九〇五)、老驥『新孽鏡』(科學會社、一九〇六)。也有用鬼話寫的、如陸士諤『鬼國史』(改良小說社、一九〇九)、葛嘯儂『地府志』(集成圖書公司、一九〇八)。有用神話的、如破佛『天上大審判』(均益公司、一九〇八)。專寫某一地方的、也有陸士諤『新上海』(改良小說社、一九一〇)、佚名『斷腸草』(一名『蘇州現行記』)等。『阿英全集』第八卷(安徽教育出版社)四十六・七頁。

又第十一章云、從題材方面說、晚清小說產生得最多的、是暴露官僚的一類。李伯元的『官場現形記』六十回、是這一方面的代表作品。此外又有冷泉亭長的『繪圖後官場現形記』甲編八回(小說保存會版、一九〇八)、天公『最近官場祕密史』前後編三十二回(新新小說社、一九一〇)、心冷血熱人『新官場現形記』一二集(改良小說社、一九〇八)、延陵隱叟『特別新官場現形記』十二回(文明小說社、一九〇九)、陸士諤『官場怪現狀』初集十回(大聲小說社、一九一一)、傀儡山人『官場笑話』二卷(改良小說社、一九〇八)、天夢『官場離婚案』十二回(改良小說社、一九一〇)、李韵『官場風流案』十三回(改良小說社、一九〇八)、張春帆『宦海』四卷二十回(環球社、一九〇九)、蘇同『傀儡記』十六回、『無耻奴』十二回(自印、一九〇八)、佚名『綠林變相』(改良小說社、一九一〇)、陸士諤『六路財神』(改良小說社、一九一〇)、黃小配『宦海昇沈錄』二十二回(香港實報館、一九〇九)、惠天嘯儂『宦海風波』(小說圖書報、一九〇七)、不可考者尚多。部分寫到官僚的、如『文明小史』、『二十年目睹之怪現狀』、更是不知有多少種。這十足證明人民對于當時官僚的憎惡。(後略)　同上一三六頁。

又第十三章云、……教育與學生應該是被注意的了、而事實也全是些譴責之作、沒有一部很眞實的反映他們的書。比較可讀的、只有一部『苦學生』和一部譴責的『學究新談』。(中略)『繡像小說』又有悔學子『未來教育史』、亦未完。吳趼人『學界鏡』四回(『月月小說』)、天僇生『學究教育談』(『月月小說』)、也是譴責之作、無特殊優點。暴露留學生的、有履冰『東京夢』八回(作新社、一九〇九)、叔夏

『女學生』（改良小說社、一九〇八）、老林『學堂現形記』（又名『學究變相』、改良小說社、一九〇九）、瘦腰生『最近學堂現形記』（小說進步社版、一九〇九）、遁廬『學生現形記』（樂群版、一九〇六）、皆不足述。同上一九一頁。

「黑幕小說」　宋雲彬・錢玄同「論黑幕書」云、玄同先生：近來黑幕小說日出不窮、每天報紙上黑幕出版的廣告、總有三四起之多。有一位書業中人對我說、黑幕書銷路之廣、出人意外。那些正當雜誌、如『科學』等、購者反寥寥無幾。唉！先生！我國人看書的程度低到這樣、眞可令人痛哭！這些黑幕小說所敍的事實、頗與現在之惡社會相吻合、一般青年到了無聊的時候、便要去實行摸倣、所以黑幕小說、簡直可稱做殺人放火姦淫拐騙的講義。先生對于『靈學雜誌』曾經大加指斥。對于這種流毒無窮的黑幕、何以尙無反對的表示呢？　宋雲彬　一九一八年一〇月二五日

〃黑幕〃書之詒毒于青年、稍有識者皆能知之。然人人皆知〃黑幕〃書爲一種不正當之書籍、其實與〃黑幕〃同類之書籍正復不少。如：『跬情尺牘』、『香閨韵語』、及〃鴛鴦蝴蝶派的小說〃等等、皆是。此等書籍、從一九一四年起盛行。四年以來、凡變過幾種面目。其實十六兩還是一斤、內容之腐敗荒謬是一樣的。此種書籍盛行之原因、其初由于洪憲皇帝不許腐敗官僚以外之人談政、以致一斑〃學干祿〃的讀書人無門可進、乃做幾篇舊式的小說、賣幾個錢、聊以消遣。後來做做、成了習慣、愈做愈多。別人見其有利可圖、于是或剪『小時報』、『探海燈』之類、或抄舊書、或隨意胡謟、專揀那穢媟的事情來描寫、以博志行薄弱之青年之一盼。適值政府厲行復古政策、社會上又排斥有用之科學、而會得做幾句駢文、用幾個典故的人、無論那一方面都很歡迎、所以一切腐臭淫猥的舊小說復見盛行。研究的人于用此來敷衍政府社會之餘暇、亦摸仿其筆墨、做些小說筆記之類。此所以貽讀于青年之書日見其多也。本志既以革新青年頭腦爲目的、則排斥此類書籍、自是應盡之職務、此後當著論及之、惟不欲專斥以〃黑幕〃爲名之一種耳。自一九一三年袁皇帝專政以來、復古潮流一日千里。今距袁皇帝之死已二年有餘、而復古之風猶未有艾。〃黑幕〃書之類亦是一種復古、卽所謂〃淫書者〃之嫡系。此外如算命書、看相書、風水書、中國醫書、萬年曆、用做八股試帖法論詩文之書、層出不窮。

從前爛版糙紙賣十幾個銅錢者、今改用洋紙鉛印賣幾毛錢或一二元、居然會有銷路、這也可見現在社會的智識了。清末亡時、國人尚有革新之思想、到了民國成立、反來提倡復古、袁政府以此愚民、國民不但不反抗、還要來推波助瀾、我眞不解彼等是何居心。　錢玄同　一九一九年一月九日　『新青年』第六卷一號

仲密（周作人）「再論〝黑幕〟」云、……我的意見、總括起來是這幾句話：〝黑幕不是小說、在新文學上幷無位置、無可改良、也不必改良。〟所以對于楊君提出的四條重大問題、只有一個〝否〟的答案。（中略）一總答一個〝否〟字、却別寫出四條答案如下：

第一、黑幕與現代中國所謂〝文學〟的潮流相合。因其爲全國〝文人〟之結晶的著作、公認是古今最好小說。

第二、黑幕與現代中國社會的思想潮流相合。因其順應社會的需要、迎合社會的心理。

第三、黑幕與中國所謂〝人生〟問題相合。因其代表一般人的〝人生觀〟。

第四、黑幕與中國所謂〝道德〟不相冲突。因其標榜勸戒、與善書淫書的宗旨相合。

所以我下一個斷定：黑幕是一種中國國民精神的出產物、很是爲研究中國國民性社會情狀變態心理者的資料、至于文學上的價值、却是〝不值一文錢〟。……八年二月十五日

『新青年』第六卷二號・一九一九年二月

周作人にはこの他「論〝黑幕〟」（一九一九年一月『每周評論』第四號・『周作人文類編』第三卷所收）がある。

羅家倫「今日中國之小說界」云、（前略）中國近年來小說界似乎以上發達。報紙上的廣告、牆壁上的招貼、無處不是新出小說的名稱。我以爲現在社會上做小說的如此之多、看小說的如此之盛、那一定有很多好小說出現了。那知道我留心許久、眞是失望得很呢！現在我以分析的法子、把現在中國新出的小說分做三派。待我說來！

第一派是罪惡最深的黑幕派。這一種風氣、在前清末年已經有一點萌孽。待民國四年上海『時事新報』徵求『中國黑幕』之後、此風遂以大開。現在變本加厲、幾乎彌漫全國小說界的統治區域了！推求近來黑幕小說派發達的原因、有最重要的兩個。第一是因爲近十幾年以來政局不好、官僚異常

腐敗。一般恨他們的人、故意把他們的生活、他們的家庭、描寫得淋漓盡致、以舒作者心中的憤悶。當年的『孽海花』一類的小說是這類的代表、不過還略好一點、不同近日的黑幕小說的胡鬧罷了！第二個原因是爲了近來時勢不定、高下二等游民太多。那高等多占出身寒素、一旦得志、恣意荒淫。等到一下臺、想起從前從事的淫樂、不勝感慨。于無聊之中、或是把以前〃勾心斗角〃的事情寫出來做小說、來教會他人（上海確有這一種人）。或者專看這種小說、以味餘甘、——所謂〃雖不得肉、過屠門而大嚼〃的便是。那下等游民、因爲生計維艱、天天在定謀設計、現在有了這種陰謀詭計的教科書、爲甚麼不看呢？從這兩大原因、于是發生出許多的黑幕小說來。諸位一看報紙就知道新出的。『中國黑幕大觀』、『上海黑幕』、『上海婦女孽鏡臺』等不下百數十種。『官場現形記』、『留東外史』也是這一類的。裏面所載的、都是〃某某之風流案〃、〃某小姐某姨太之祕密史〃、〃某女拆白黨之艷質〃、〃某處之私娼〃、〃某處盜案之巧〃等等不勝枚擧。徵求的人、杜撰的人、莫不借了〃言之者無罪、聞之者足戒〃的招牌、來實行他們騙取金錢教人爲惡的主義。諸君！世上淫盜的事、誰不知道是不好的？何必等這類著小說的人來說一遍？這類著小說的人、無非是告訴讀者如何可以仿行某某的風流、如何可以接近某種的小姐姨太、何處可以訪如拆白黨、何處可以遇着私娼、用何種方法可以實行何種的盜案罷了！諸君、這不是我過度的話、因爲人類的〃獸性〃都是幾分不能除絕的。一旦得了作惡的法門、就是〃飲酖止渴〃、也都肯干。我們一看歷史、聰明人干糊塗事的多得很呢！他們說〃聞之者足戒〃、我眞不知道他們〃戒于何有〃了！（後略）　一九一九年一月『新潮』第一卷第一號

胡適「五十年來之中國文學」第九章云、以上略述這五十年的白話小說。民國成立時、南方的幾位小說家都已死了、小說界忽然又寂寞起來。這時代的小說只有李涵秋的『廣陵潮』還可讀。但他的體裁仍舊是那沒有結構的「儒林外史式」。至於民國五年出的「黑幕」小說、乃是這一類沒有結構的諷刺小說的最下作品、更不值得討論了。北方平話小說近年來也沒有好作品比得『兒女英雄傳』或『七俠五義』的。（民國）十一・三・三。『胡適文存』第三集卷二。

王晦「中國黑幕大觀序」云、道德墮落、益以內亂外患、商

業凌夷、國人生計困難、遂相率爲卑汚殘忍詐僞欺罔之事、以求幸穫。受禍者無所得伸、或泄其憤于口舌、文人筆而存之、是爲時下流行之黑幕。黑幕者、摘奸發核之筆記也。某報社創之于先、各書肆繼之于後。惟某報社之黑幕、紀事恒囿于一隅、而各書所出之黑幕、內容又未必盡佳。于是有路濱孫者、奮袂而起、手編『中國黑幕大觀』四巨册、都百萬言、自比燃犀鑄鼎、奸魅無遁形矣。書成乞序于予、予先索其稿讀之、殊有未盡之處。卽就予十年來所聞見、政局之離奇變幻、大人先生之機巧詐僞、多有報紙所不便揭載、而『黑幕大觀』所未能盡行採入者。惜予無暇、不克爲『黑幕大觀』效土壤細流之助、然『黑幕大觀』之增進一般人士之知識、固已不少矣。曩者約翰青年會學校責予演說、予卽以近世社會情形、述其大略。予謂、〃少年人之在學校、耳目所接、皆爲正大光明之人物、中懷坦然、幾不知學校以外、尙有一切社會。洎乎舍學業、謀生計、投身入世、而幡然改觀、甚有驚駭錯愕、不知所措者〃。故『中國黑幕大觀』、學校以外之敎科書也、使天眞爛漫之少年、忠厚樸實之君子、讀之而知所戒備、尤使貧困之士、勿歆小利而隳其身家、厥功偉哉！第有一言、爲讀者諸君告。此書之用意、重在事而不在人、諸君但信社會中有此事、不必信此事之屬此人。若欲按圖索驥、追求姓名、俾得面肆嘲笑、取快一時、則大失忠厚之道矣。

中華民國六年十二月一日王晦鈍根書于新申報館　一九一八年中華圖書集成公司版『中國黑幕大觀』『中國近代文學大系』文學理論集第二卷。